

松添貝塚 II

青島歴史公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999
宮崎市教育委員会

はじめに

宮崎市の青島地域は、国指定特別天然記念物「青島亜熱帯性植物群落」、一般に「鬼の洗濯板」と呼ばれる「青島の隆起海床と奇形波蝕痕」、「内海のヤッコソウ発生地」、野島神社境内の「内海のアコウ」などの自然の造形と温暖な環境とで広く全国に知られている地域であります。ですが、それ故に早くから観光開発が行われた地区でもあり、さらにリゾート法による再開発や区画整理事業も行われた地区もあります。

今回調査しました松添貝塚は、県内に残る数少ない貝塚であり、戦後に3回の発掘調査が行われその規模の大きさや希少性から、その保存が望まれていました。今年度は、青島シーガル土地区画整理事業により計画されました青島歴史公園建設に伴い、松添貝塚の確認と保存を目的とした調査と駐車場等の用地部分の調査を行い、貴重な貝塚を確認、展示することができました。

又、宮崎市では市制70周年記念事業としまして、前方後円墳7基を含む国指定史跡「生日古墳群」を保存整備し史跡公園化する予定であります。この「生日古墳群」の所在する跡江台地は弥生時代の環濠集落や円形周溝墓・土壙群が発見されており、弥生時代から古墳時代にかけての宮崎平野を知るうえで重要な遺跡を調査保存する事は意義有る事と考えております。既に整備し終えました古墳時代後期の国指定史跡「蓮ヶ池横穴群」、今回展示しました「松添貝塚」と併せて各時代の特徴を頗りました史跡公園を市内の各地に造る事は宮崎市の地理と歴史を知る上で興味深い物となる事でしょう。

最後になりましたが、発掘調査に従事された作業員の皆様、公園建設の際に協力頂いた工事関係の皆様に感謝申し上げると共に、本書が関係各位の参考になれば幸いです。

平成11年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫



例　　言

1. 本書は、宮崎市教育委員会が平成9年9月18日から平成9年10月31日まで実施した松添貝塚、松添遺跡の発掘調査の報告書である。

2. 調査組織

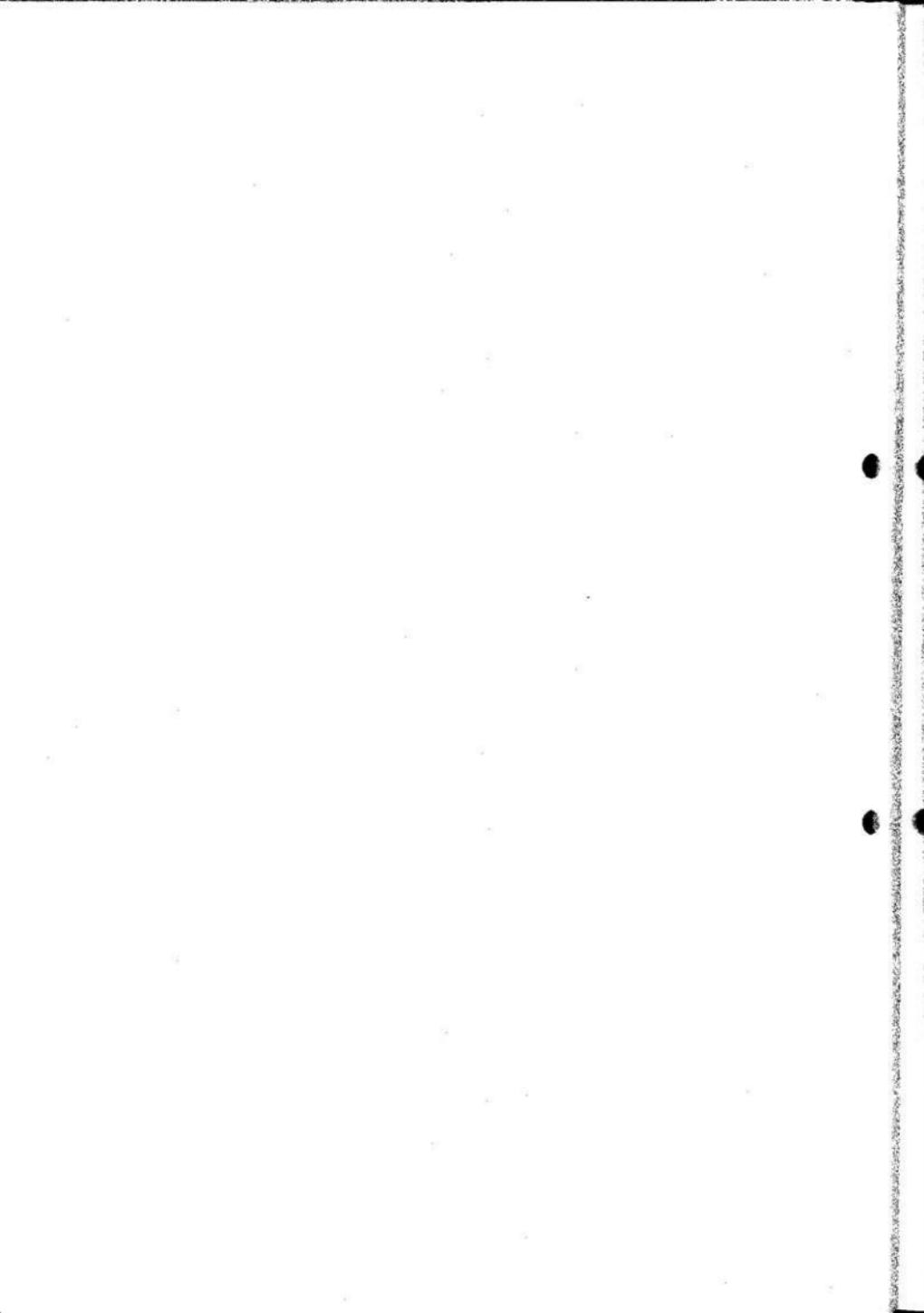
調査主体	宮崎市教育委員会	文化振興課
総括	課長	野間 重孝
(平成9年度)		
庶務担当	技師	鳥枝 誠
現場担当	技師	中山 豪
	技師補	稻岡 洋道
整理担当	嘱託	椎山美子
	タ	松永 光雄
	タ	小川 正子
(平成10年度)		
庶務担当	主事	竹野 隆司
整理担当	主査	中山 豪(国民年金課)
	嘱託	久富なをみ

3. 本書の執筆は、中山が行った。
4. 本書に使用した図面は中山、稻岡、椎、松永、小川が製作し、写真的撮影は中山、稻岡が行った。
5. 本書の編集は中山、久富が行った。
6. 本書には、平成4年度から平成7年度にかけて青島シーガル上地区両整理事業に伴い宮崎市教育委員会が発掘調査を行った、松添遺跡の概要を併せて報告している。
航空写真に就いては株式会社スカイサーベイに依頼した。
7. 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。

総 目 次

松添貝塚 II	1
附 松添遺跡の概要	5 9

松 添 貝 塚 II



第7図	出土土器実測図1	8
第8図	出土土器実測図2	9
第9図	出土土器実測図3	10
第10図	出土土器実測図4	12
第11図	出土土器実測図5	13
第12図	出土土器実測図6	14
第13図	出土土器実測図7	15
第14図	出土土器実測図8	16
第15図	出土土器実測図9	17
第16図	出土石器実測図1	19
第17図	出土石器実測図2	20
第18図	出土石器実測図3	21
第19図	出土石器実測図4	22
第20図	出土遺物実測図	23

表 目 次

第1表	土器観察表	25
第2表	石器観察表	32
第3表	その他観察表	34

図 版 目 次

図版1	調査状況1	50
図版2	調査状況2	51
図版3	調査状況3	52
図版4	出土遺物1	53
図版5	出土遺物2	54
図版6	出土遺物3	55
図版7	出土遺物4	56
図版8	出土遺物5	57
図版9	出土遺物6	58

第1章 歴史的環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

松添貝塚は日向灘に面し、波状岩と亜熱帯植物で知られる青島から約1km陸地に入った標高約6～10mの南北に走る小砂丘に位置している。砂丘自体は北側を低丘陵、南側を山塊の縁に囲まれた東西方向の細い入り込み谷の端部に形成されており、砂丘を含む東側は畑として利用され、砂丘の西側は水田として利用されていた。

青島から内海にかけてはアコウ、ビロウ等の亜熱帯植物やスダジイに寄生するヤッコソウ等の希少植物が見られるうえ、照葉樹林帯とアカウミガメの産卵が行われる砂丘や黒潮に囲まれた温暖豊饒な地域であったが、現在は杉の植林が進んだうえ砂浜の減少や諸開発で様変わりしている。

松添貝塚の砂丘の西側には縄文時代後期の遺跡である松添遺跡、北側には宮崎県指定史跡青島村古墳が存在し、南には縄文時代後期から奈良時代までの複合遺跡である右葛ヶ迫遺跡が隣接している。更に、南に約1.5km離れた青島港の西側には縄文時代晚期の納屋向貝塚、南東の岬には中世伊東48城の一つである紫波洲崎城が築かれており、青島地区の歴史的位置付けを現している。

又、青島地区から北に約6km離れた木花地区は、宮崎学園都市遺跡群、車坂・山下遺跡群、西ノ原遺跡、木花村古墳等に見られるように、旧石器時代から現在まで連続と人々の営みが続いている。なかでも注目すべきは、縄文時代後期から晚期にかけての松添遺跡・松添貝塚との関係、青島村古墳と木花村古墳との関係、それぞれが伊東48城である紫波洲崎城と車坂城・今江城との関係であり各時代における両地域の係わりを示し、宮崎平野南部の有機的な繋がりを解明する鍵となっている。

2. 調査に至る経緯

松添貝塚は、第2次世界大戦以前から青島の土器散布地として知られていたが、昭和20年代の後半に宮崎大学の田中熊雄氏らによって数ヶ所の坪掘り発掘が行われ、縄文時代晚期の貝塚であることが判明し南九州における重要な遺跡として認識された訳である。

又、昭和37年には賀川光夫氏ら別府大学、宮崎高等学校による縄文時代後晚期遺跡の調査として松添貝塚の発掘が行われ、人骨が検出されるとともに後期終末の西平II式を下層に、上層に晚期前半の黒色磨研土器と南九州在地の貝殻文系土器が共伴して検出されたことにより松添式の設定がなされている。

更に、昭和47年には宮崎市教育委員会により遺跡の範囲確認を主眼とした調査が行われた際に、犬の埋葬が確認されている。貝塚の範囲は東西約12m、南北約18mであり、土器片等の散布範囲が東西約180m、南北約200mに及ぶことが確認されその全体を松添遺跡として認識されている。

宮崎市では、青島地区的リゾート開発の一環として青島シーガルト地区整理事業を計画し、

第1図 週辺図



第2図 調査位置図



平成2年度から平成8年度までに松添遺跡を中心とした地区を対象に施工されている。区画整理課との事前協議で、青島村古墳の現状確認調査、松添貝塚と青島村古墳を含んだ一帯を公園として残すこと、その他の区画は発掘調査を行う旨を決定した。平成4年度から平成7年度に渡る発掘調査では、松添貝塚の西側の小丘陵上で黒色磨研土器の検出、その西側の水田域では市来式土器から三万田式土器が一面に広がった形で検出され、松添遺跡の時期が縄文時代後期前半まで遡ることが判明し、貝塚との関係が今後の課題として残された。

今回の調査は、観光課による青島歴史公園の整備に伴い、駐車場用地の発掘調査と貝塚の残存状態の確認と展示を目的として行った。

第2章 松添貝塚の調査

1. 調査の概要（第2図～第5図）

平成9年度の調査では、歴史公園駐車場に当たる部分から便益施設になる部分までの松添遺跡と松添貝塚と呼ばれているものの貝層が実際に残存しているかを検出する事を目的に調査を行った。

駐車場の敷地部分には、 $1\text{m} \times 1\text{m}$ のトレンチを2本 1m 間隔で入れたが、公園造成に当たり既に 1m 以上の盛上がりがされており、その下層は旧表土（畑地）、粘質砂層、黄色砂層が入り基盤には宮崎層群が検出されたが、明確な遺構、包含層はなく、数少ない遺物も流れ込みの様相を呈している。

駐車場から便益施設にかけては表土を剥いだ段階で土器が出土したため面的な発掘を行い、岩層、砂層、岩層、砂層の互層状の層位と岩層間の砂層における土器包含状態を確認した。一方北岩層の北側の黄色砂層面では攪乱坑と時期不明溝を検出しただけであった。

遺物の出土状況に就いては明確な層位は確認されず、東に向かって傾斜した波打ち際に廃棄されたものと云った感じの出土状況であった。

貝塚部分に就いては、予想される範囲にバックホーにより確認トレンチをまず4ヶ所に入れられたが貝層は検出されなかった。予想外の部分でたまたま飼犬の死骸を掘り当てたため、それを埋め換えるために貝塚予想範囲外に深掘りを入れたところ東に傾斜した2層の貝層を見出し、貝塚の現存を確認すると共に、そのトレンチの壁面を剥ぎ取り展示する事とした。

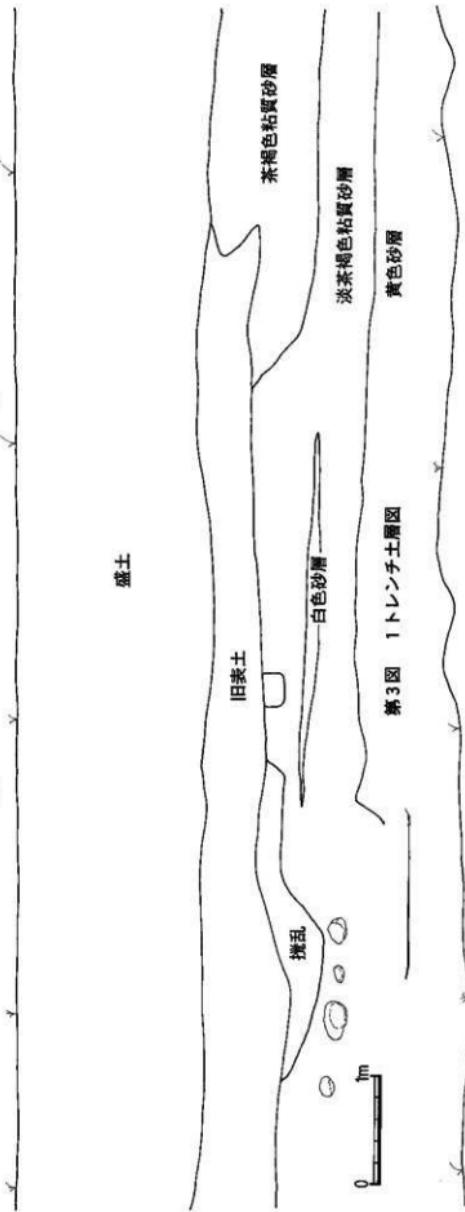
2. 遺構と遺物

1 遺構（第6図）

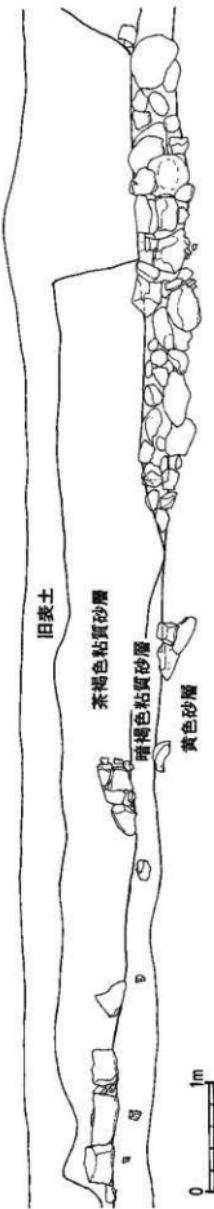
本年度の発掘調査では時期を特定できる遺構は何も検出されなかった。

遺構と呼べる物としては、駐車場北側の溝状のものがあるが、一部分であり数年前までは畑として使っていたこと、出土遺物の時期幅が広いことから現代の物と思われる。

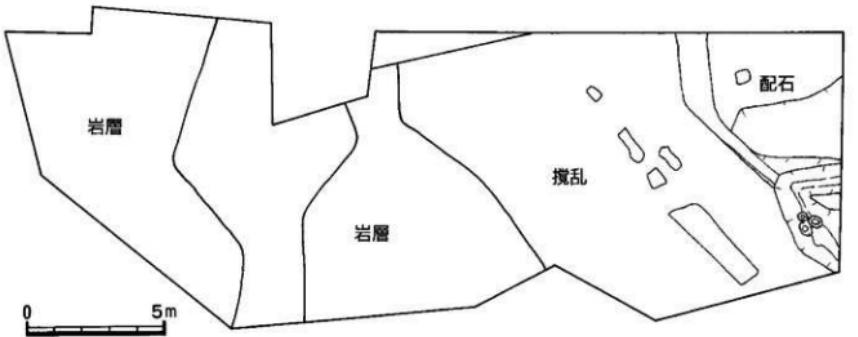
又、溝の南西に 2.5cm 四方の石と $2.0\text{cm} \times 1.0\text{cm}$ の石が三角形に配置され、辺りに石錘が4個検出された場所があり、台石と思われる3個の石がほぼ同じ高さに捕っていることから、何らかの作業場の跡と考えられる。



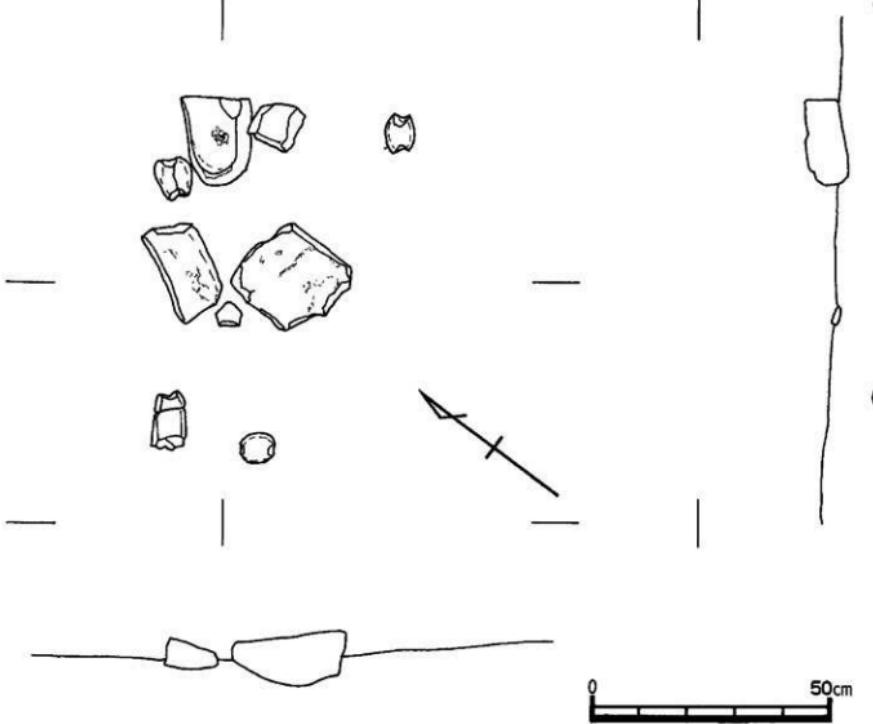
第3図 1トレンチ土層図



第4図 2トレンチ土層図



第5図 調査区図



第6図 配石状造構実測図

2 遺物

A. 土器（第7図～第15図）

出土した土器の殆どは縄文時代後期後半から晩期前半に属する土器であり、中に極僅か弥生式土器と須恵器が検出されたが、流れ込みの遺物と考えられる。

縄文土器

縄文土器は、磨消縄文系土器・沈線文（凹線文）系土器・黒色磨研土器・貝殻文土器等の精製土器・粗製土器が出土している。

I. 磨消縄文土器（第7図）

1～10は、磨消縄文の土器である。1～5は口縁部で4と5の沈線間隔はかなり狭くなっている。6～10は胴部で、7～9は沈線間が縄文と無文とが交互に配されている。10は貝殻擬縄文である。

西平式土器・三方田式土器に比定される。

II. 沈線文系（凹線文）土器（第7図・第8図）

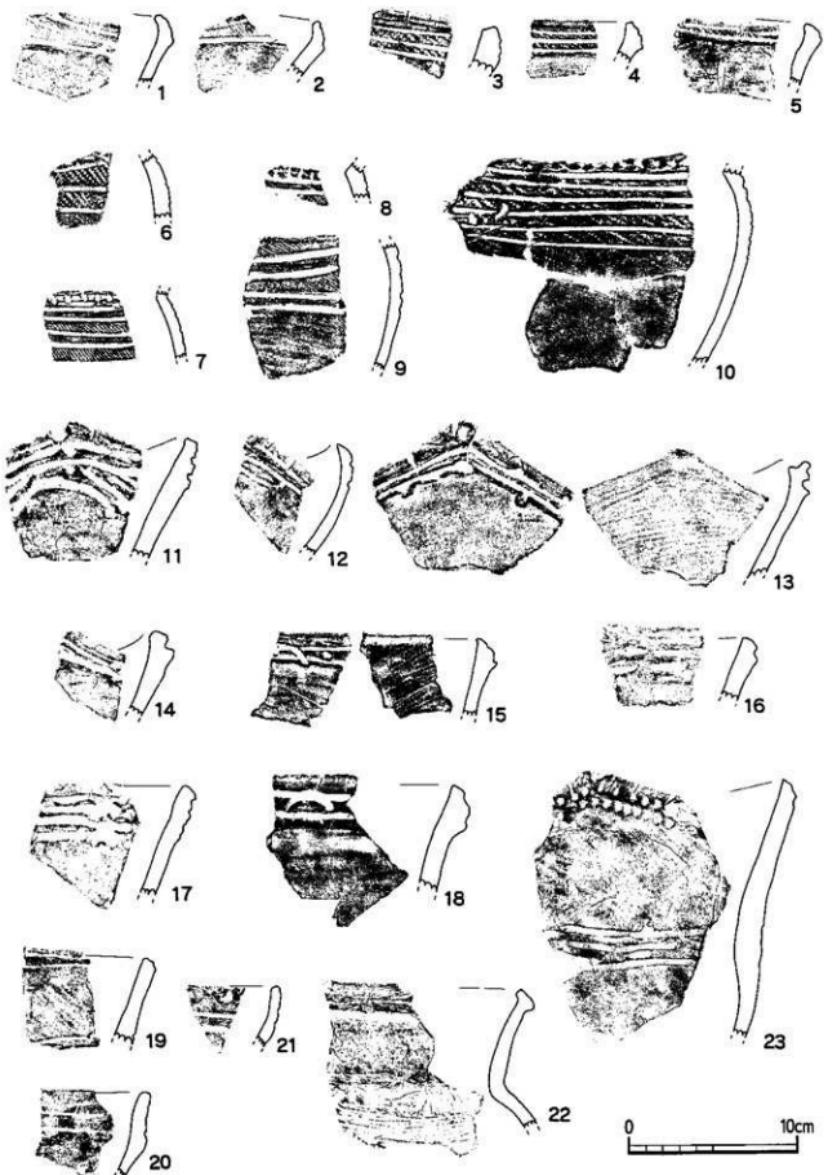
11～32は沈線文（凹線文）系の土器で、11～23は口縁部、24～32は頸部から胴部である。この一群の土器の特徴は、器形や施文は磨消縄文土器や黒色磨研土器に類似するが、磨消縄文が見られないことや、貝殻条痕調整であることである。

11～14・19～21・24～31は磨消縄文土器に似た沈線を施文するが、縄文（擬縄文）は施されずに、内外面に貝殻条痕調整が見られるものも多くある。11・13・14・28・29・30は沈線上に丸い刺突が加えられるものである。15・17・18は凹線（沈線）に三日月状の半円が施されている。16は短凹線を2列に連続施文するもの。22は胴部に乱れた沈線を施し、くの字外反する長い頸部に口唇部を逆し字状とする土器で口唇部にも沈線が浅く入れられている。23は胴部と頸部の境に連続沈線を施し、口縁部には2列の連続刺突が施されている。25は沈線間に円形の連続刺突が施され、31は三日月状の施文が連続して施されている。32は凹線が施されるものである。

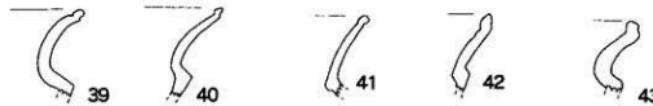
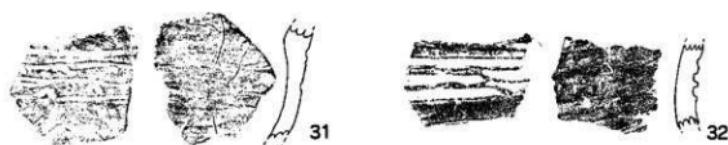
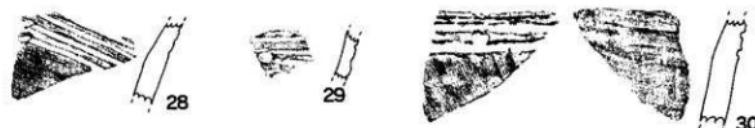
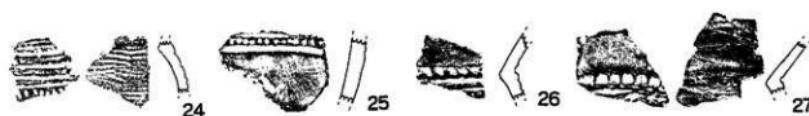
III. 黒色磨研土器（第8図・第9図）

33～66は、黒色磨研の土器である。33～43は胴部から強く外反する口縁を持つ浅鉢である。口縁端部は立ち上がらずに沈線を内外面に施す。44～60は強く外反する口縁部を持つ浅鉢で、44～55は口縁端部には沈線を内外面に施す。57～60は口縁部の内側が平坦化し体部との境に稜や段が見られる。61は口縁端部を立ち上げたもの、62・63は強くくの字に外反させたものである。64は大きく外反する口縁の浅鉢、65は口縁部に沈線を施す椀形の浅鉢である。66は口縁端部を折曲げて段を作り、段の下に格子の沈線を全面に施している深鉢である。

黒川式土器に相当すると思われる。

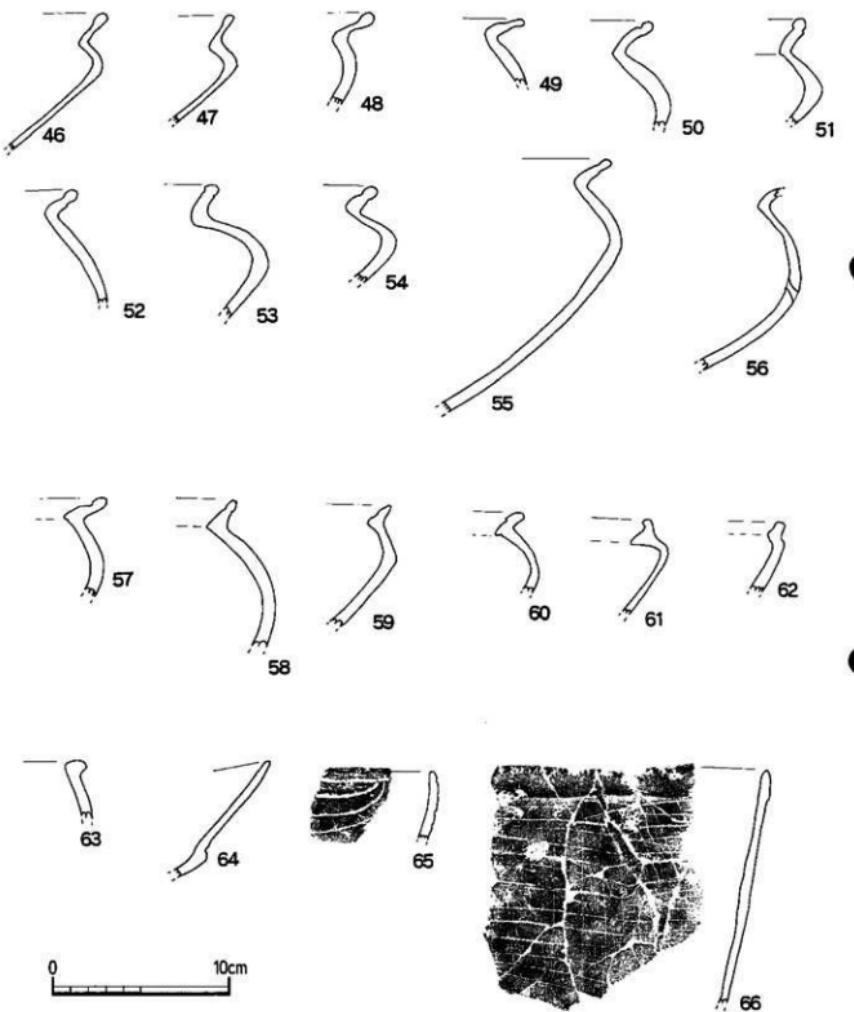


第7図 出土土器実測図1



第8図 出土土器実測図2

0 10cm



第9図 出土土器実測図3

IV. 無文土器類（第10図～第12図）

67～84は、ナデ調整の土器である。67～69は燃ネクタイ状の粘土貼り付けを持ち、70は鰐状の突起を持つものである。71～81は外反する口縁の土器で、71は丸みを帯びた胴部から大きく外反する口縁、72・73は胴部最大径と胴部と頸部の境とに屈曲部を持ち大きく外反する口縁である。77～79は72・73の頸部屈曲が無くなり外反する口縁で、80・81は更に胴部屈曲も無くなった形の口縁である。82は皿形の胴部に強く外反する口縁のものである。83は平底で胴中央部で内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立させて外に折曲げて段を作るものである。84は外反する口縁にやや甘日の三角突帯を巡らすもので、83の口縁部を省略した様な感がある。

85～87は貝殻条痕の土器で、胴部から大きく外反する口縁の土器である。

88～90は直行する口縁、91・92は直行気味の口縁で外面に沈線状の段を持つ。93・94は折曲げた口縁で段を持ち、突帯を意識した感じが見られる。

V. 突帯文土器（第12図）

95～107は口縁下に刻目のない突帯を持つもので、胴部に屈曲を持ち外反するもの、口縁端を外反させるもの、直行する口縁のものがある。95～101はナデ調整であるが、102～107は貝殻条痕である。106は口縁端を肥厚させ、107は刻目を持つ突帯である。

108～110は突帯状の部分に連続刺突を施すもので、109の刺突は内面まで突き抜けではない。

VI. 貝殻文土器（第13図・第14図）

111～140は貝殻腹縁文の土器で、111～116は外彎して立ち上がる口縁、117～119は外反する口縁、120～125は直線的な口縁、126～129は口縁端部を肥厚させるもの、130～134は口縁端を摘み出すもの、135～140は胴部である。

施文方法としては、貝殻腹縁文と沈線を組み合わせたもの（111～116）、口辺部に貝殻腹縁文を施すもの（122・124～126等）、胴部に貝殻腹縁文を施すもの（115～118・123・134）、口辺部と胴部に貝殻腹縁文を施すもの（121・127・131～133）、貝殻腹縁文で円を描くようなもの（119・120・140）とが見られる。

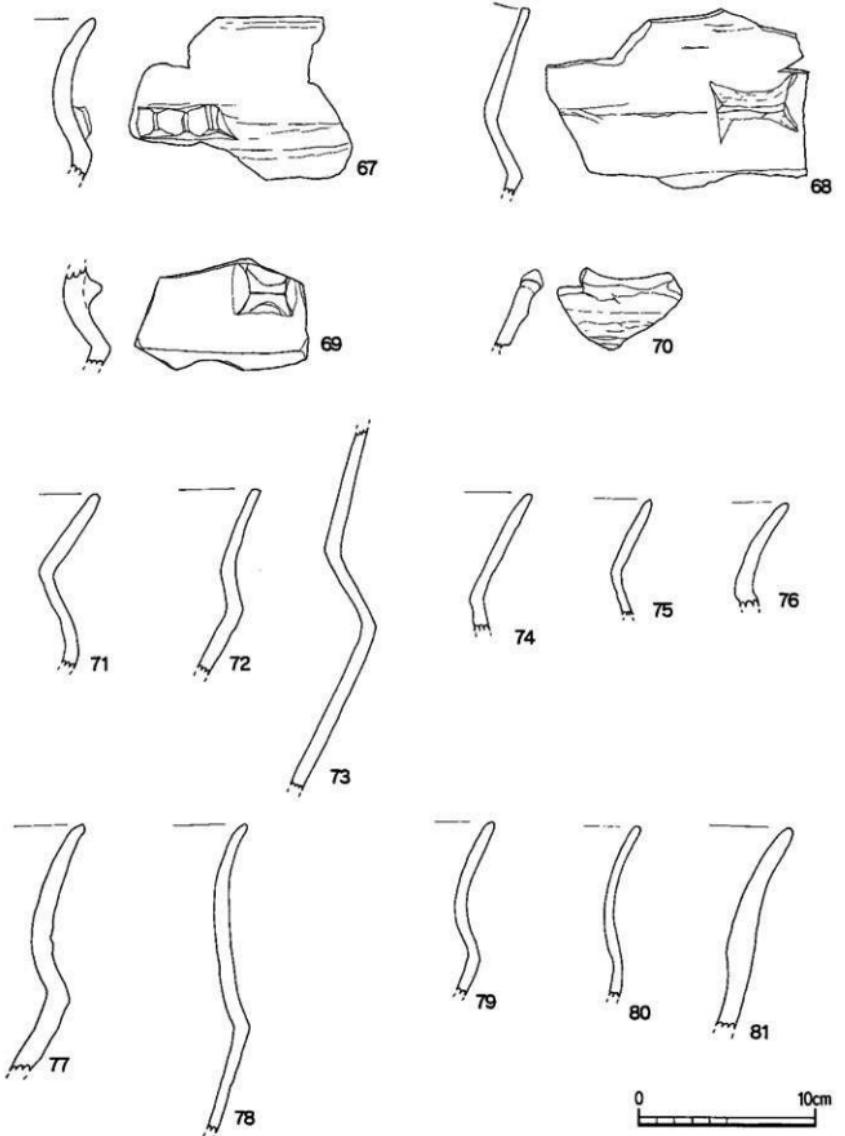
VII. その他の土器（第14図・第15図）

141～144は竹管状施文具による連続刺突文で142・144は2列平行の施文である。

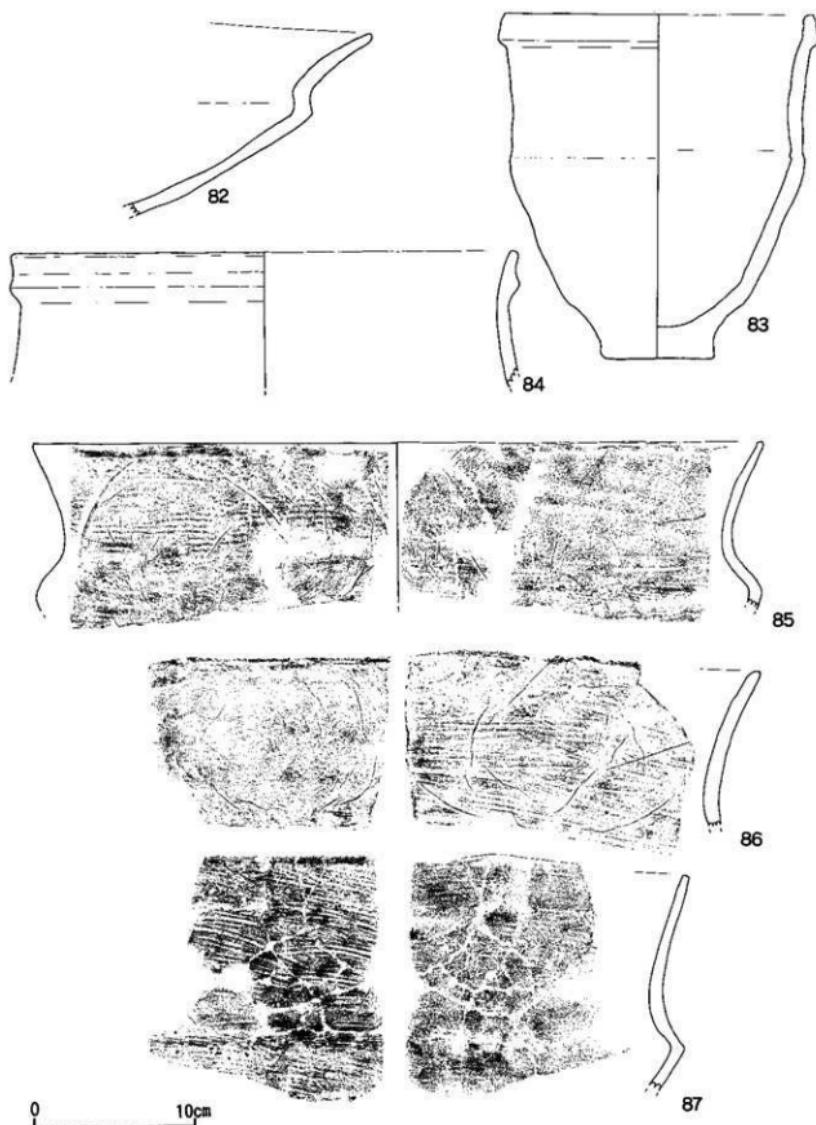
145は2本の平行沈線、146は短沈線と連続爪形文、147は短沈線、148は平行沈線による幾何学文、149・150は複合沈線文である。

151～157は組織痕土器で、151・153の様に目の大きなものから152の様に目が細かく入り組んだものまで見られる。

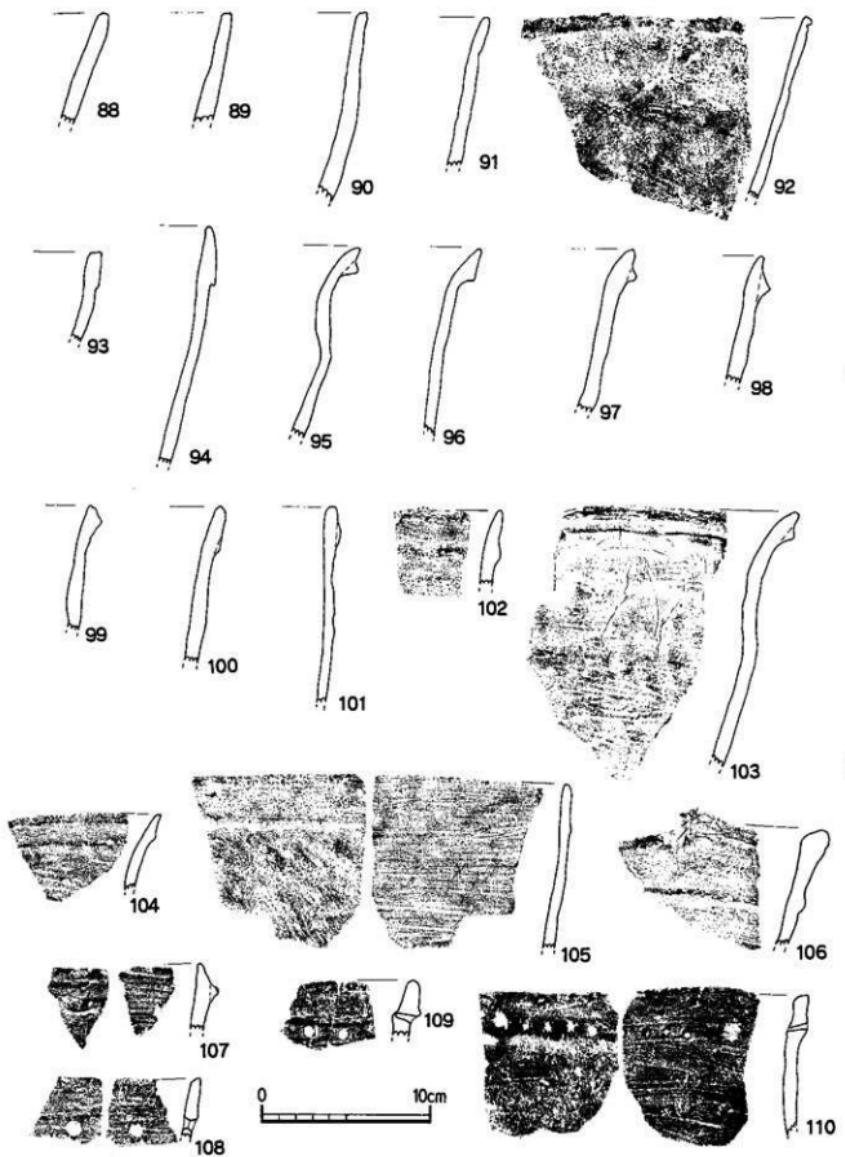
158～167は土器の底部である。バケツ状の底部のもの（158・159）、小さく底



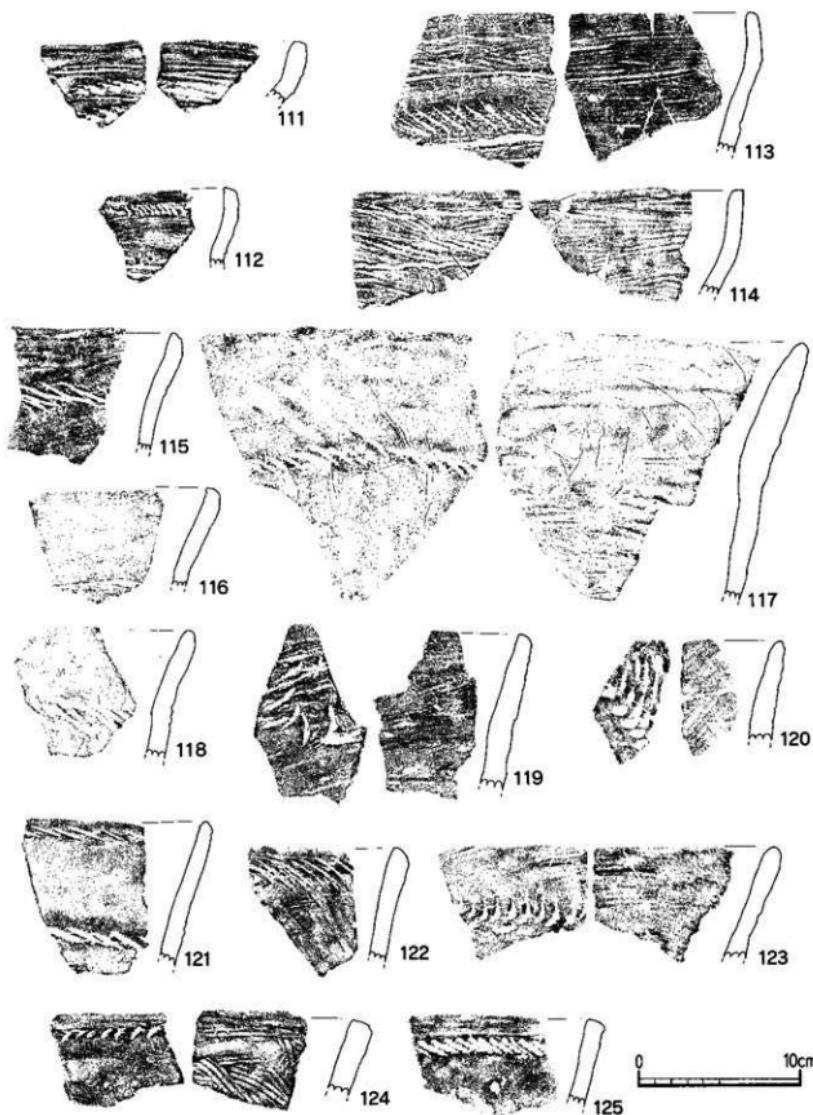
第10図 出土土器実測図4



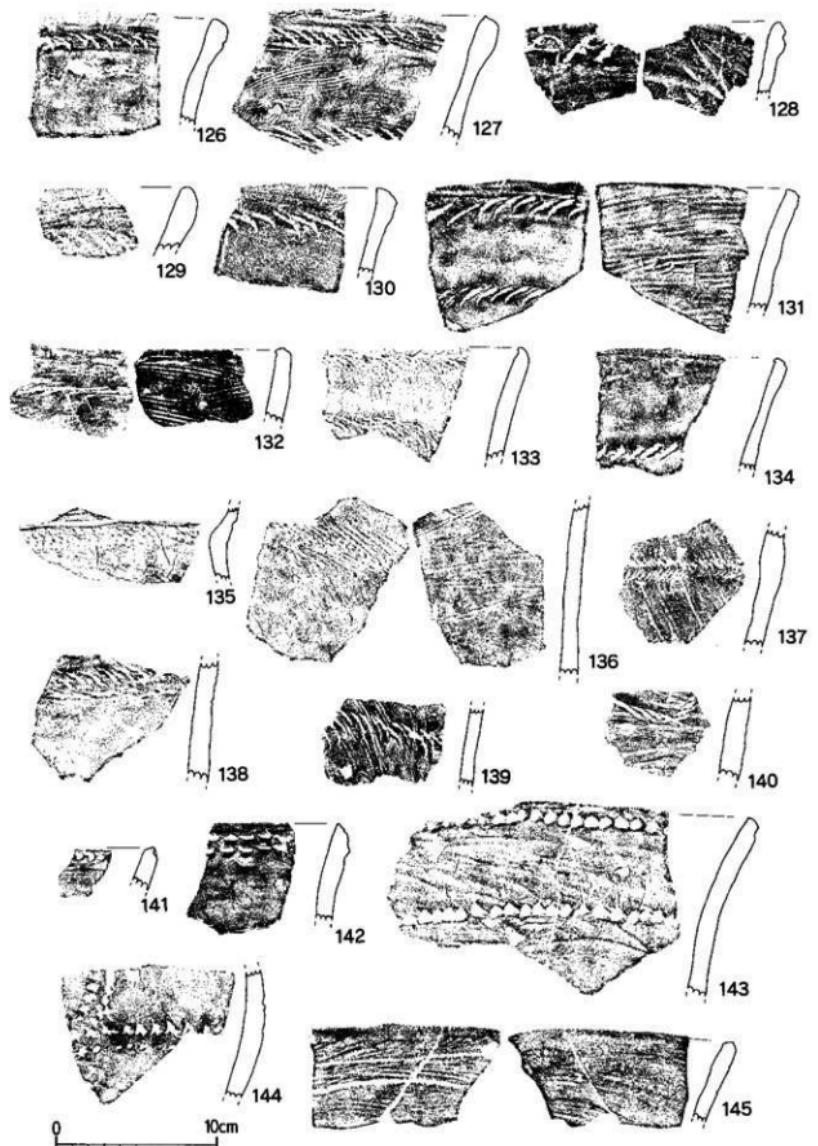
第11図 出土土器実測図5



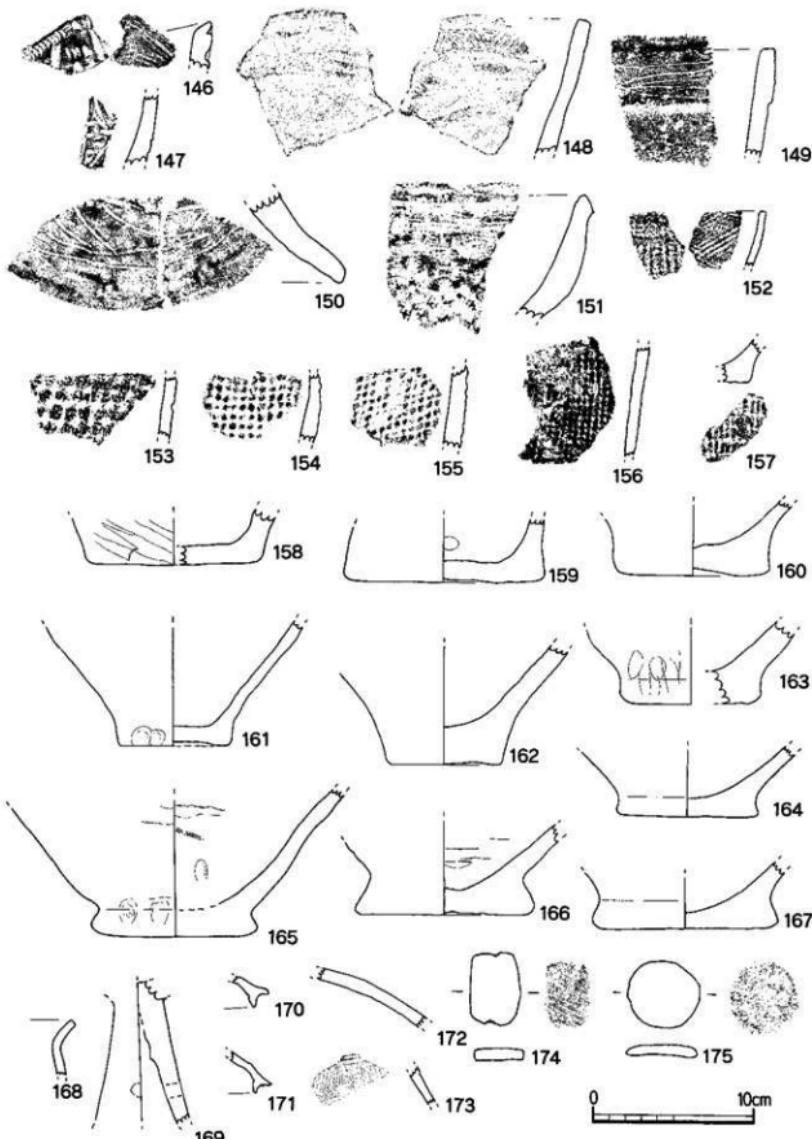
第12図 出土土器実測図6



第13図 出土土器実測図7



第14図 出土土器実測図8



第15図 出土土器実測図9

部が立ち上がるるもの（160～162）、ハの字に広がる底部のもの（164～167）があり、やや上げ底のもの（160～162）も見られる。

その他の時代の土器

縄文時代以外の土器としては、弥生式土器と須恵器が若干出土している。

168・169は、弥生式土器の壺の口縁部と高坏の脚部である。

170～173は須恵器で、170～172は壺蓋、173は高坏の脚部と思われる。

土器片製品

174は土器片鉢、175は土器片製円盤である。

B. 石器（第16図～第20図）

176～188は石斧である。183と186は剥離が大きく打製石斧とも思われ、その他は磨製石斧である。176は石材、形状から弥生時代の大型蛤刃石斧である。

189～192は、打製石斧とも石鎌とも叩き石とも思われる異形石器である。

193・194は叩き石と磨石の兼用と思われるものである。

195～218は石錘である。掲載したものは出土した石錘の一部であるが、大きさ・形態の特徴のつかめるものを選別している。195～198は切り目石錘であり、201は4ヶ所に打ち欠きが見られる。偏平円形のものが多いが円柱状のもの、長楕円形のものが見られ、重量も45g程の軽量の物から570gのもの、更には218のように6kgの碇状のものまで見られる。

219～229は凹石で、何れも両面を使用している。226～229は磨石としても使用している。

230～232は磨石で、230・231は片面が水平になるまで使用されている。

233・234は台石で、233は石皿状のもの、234は船底状のものである。

235・236は、砥石である。

237～239は縦型の石匙で、237は大型偏平なもので、238・239は刃部を欠損している。

240は使用痕のある剥片。

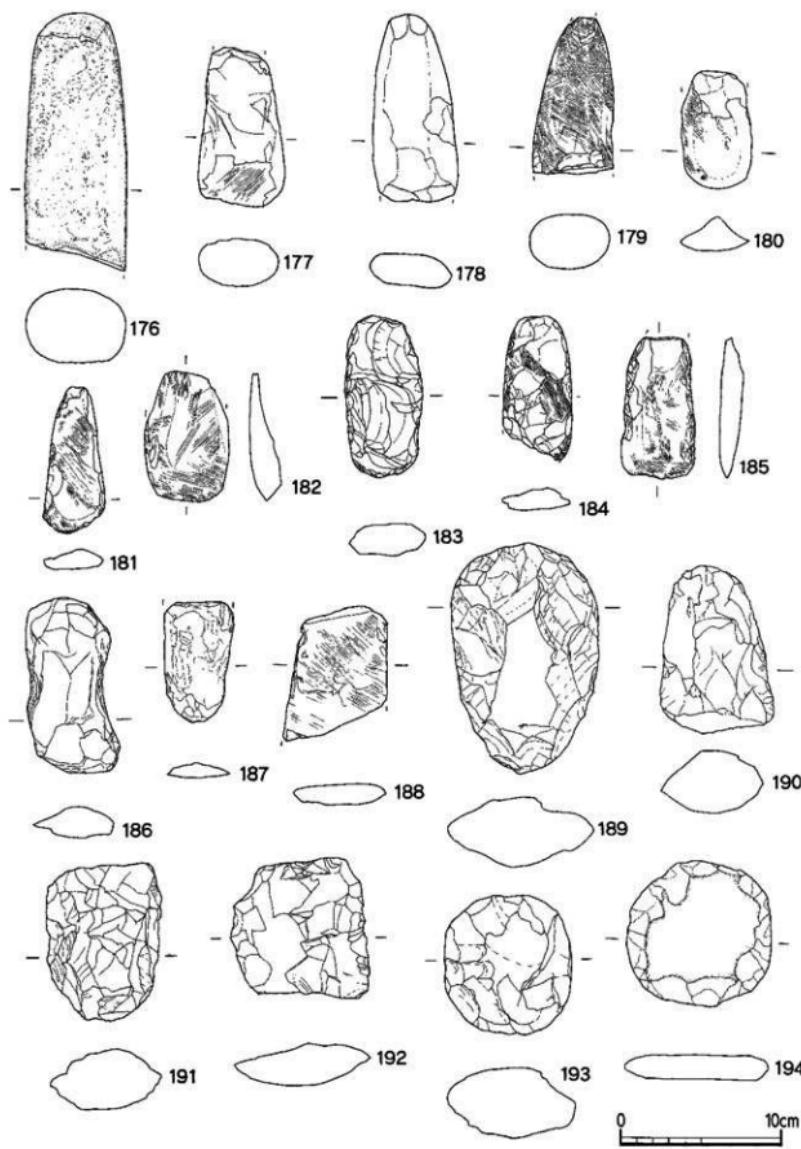
241は、サイドスクレイパー。

242は、鋸先状尖頭器の一部である。

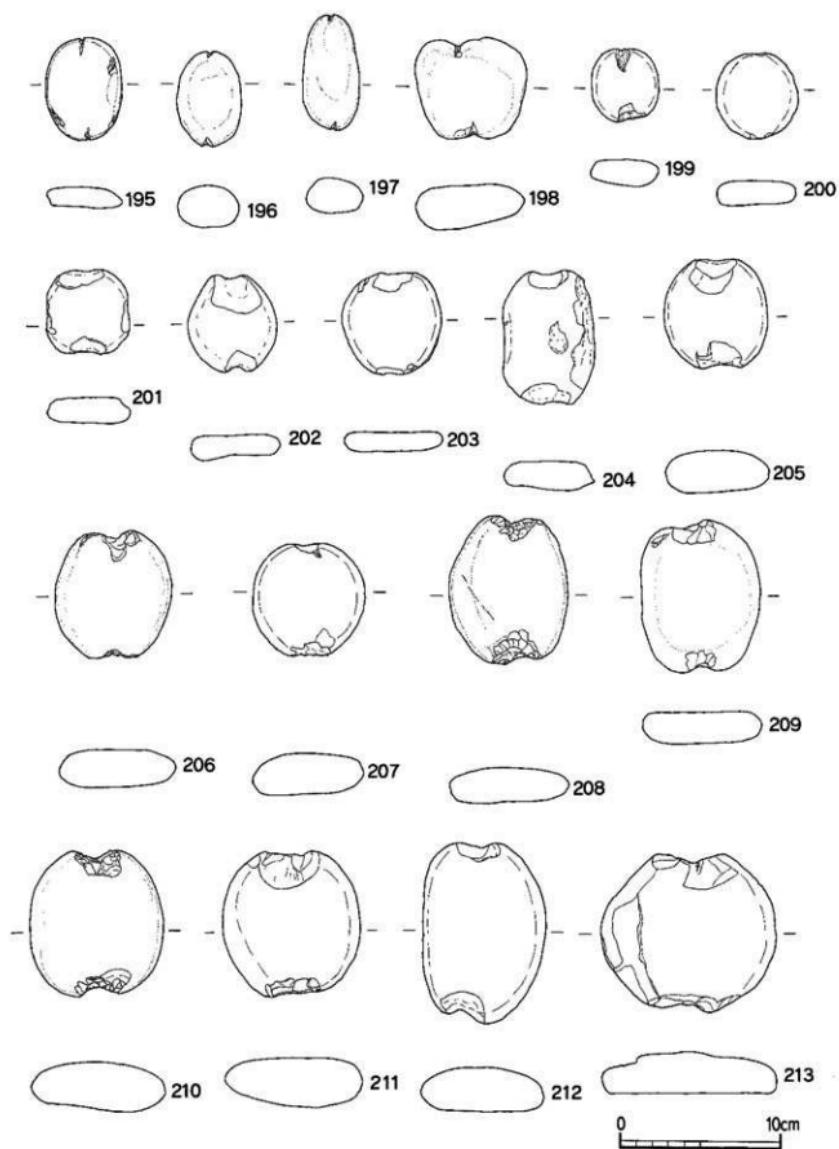
243～258は打製石鏃で、243～246は平基式、247～249は若干抉りのあるもの、250～258は抉りのあるもので中には大小の他に五角形に近いものも見られる。

259は、磨製石鏃で弥生時代のものである。

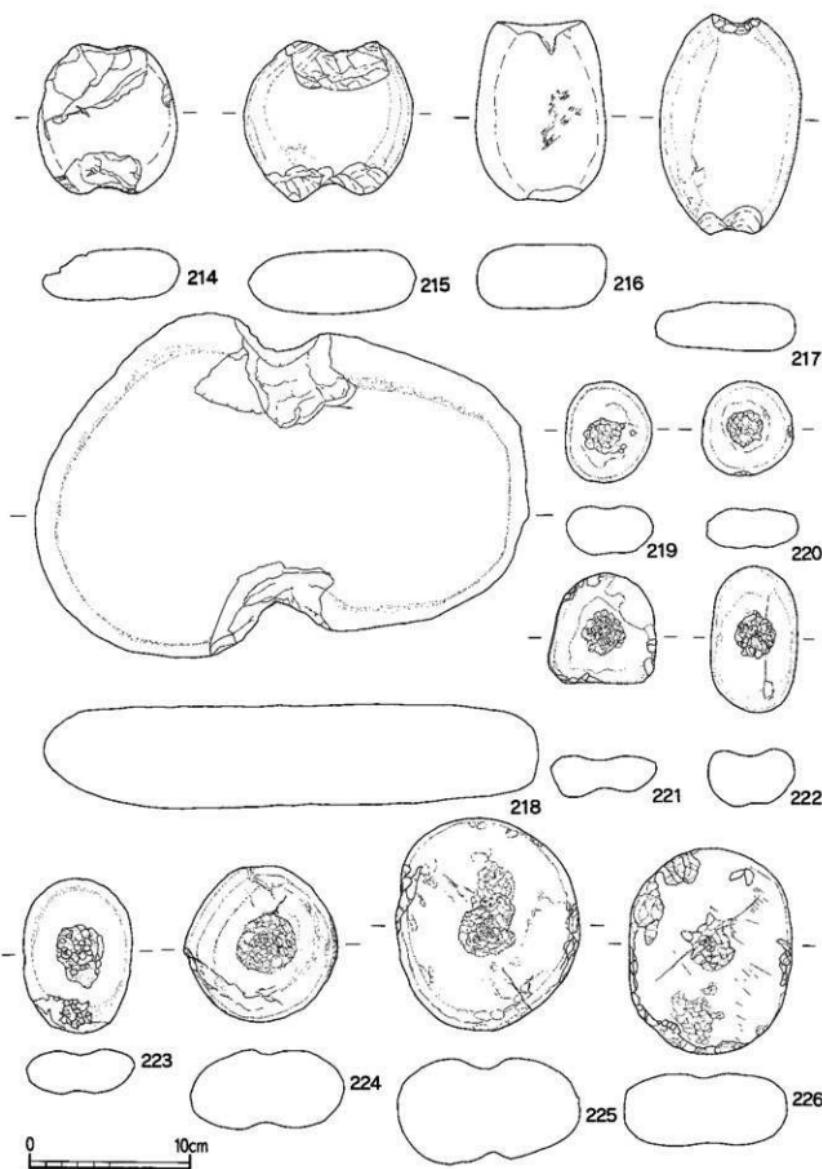
260は三角柱状の石器の一部で、石錐か尖頭器になると思われる。



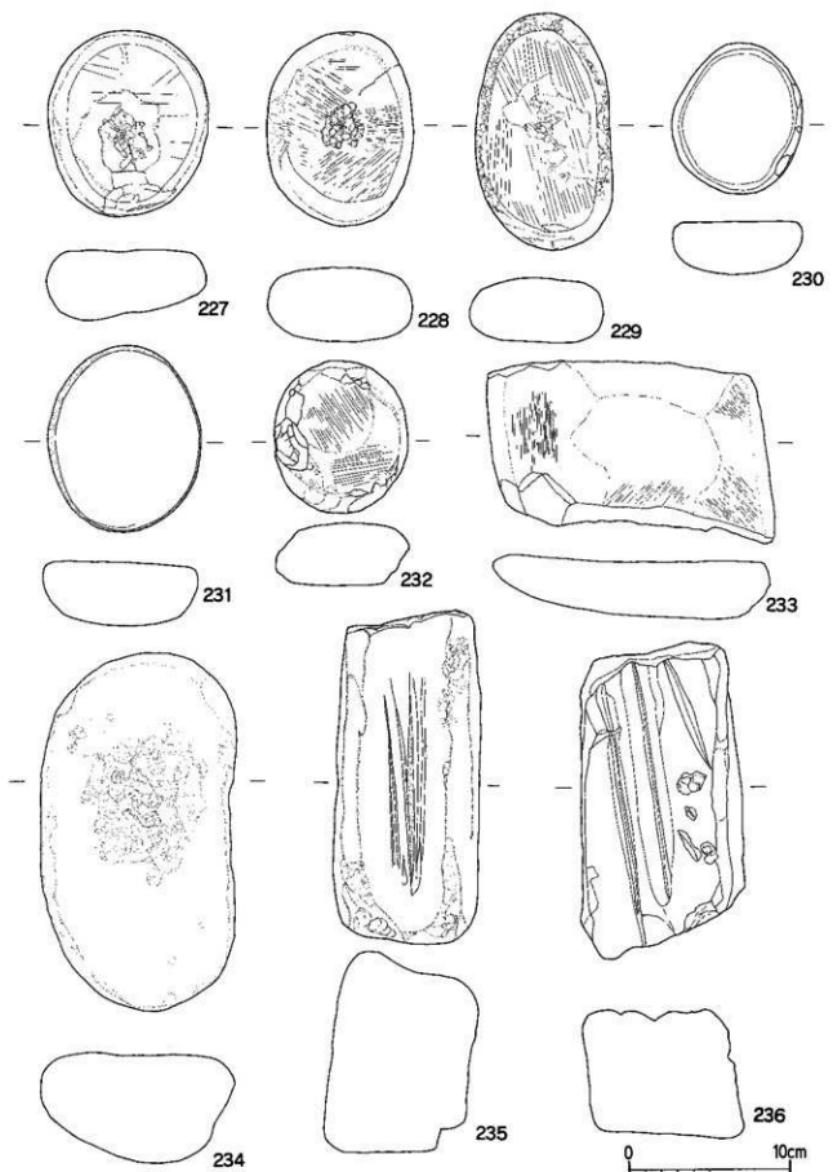
第16図 出土石器実測図1



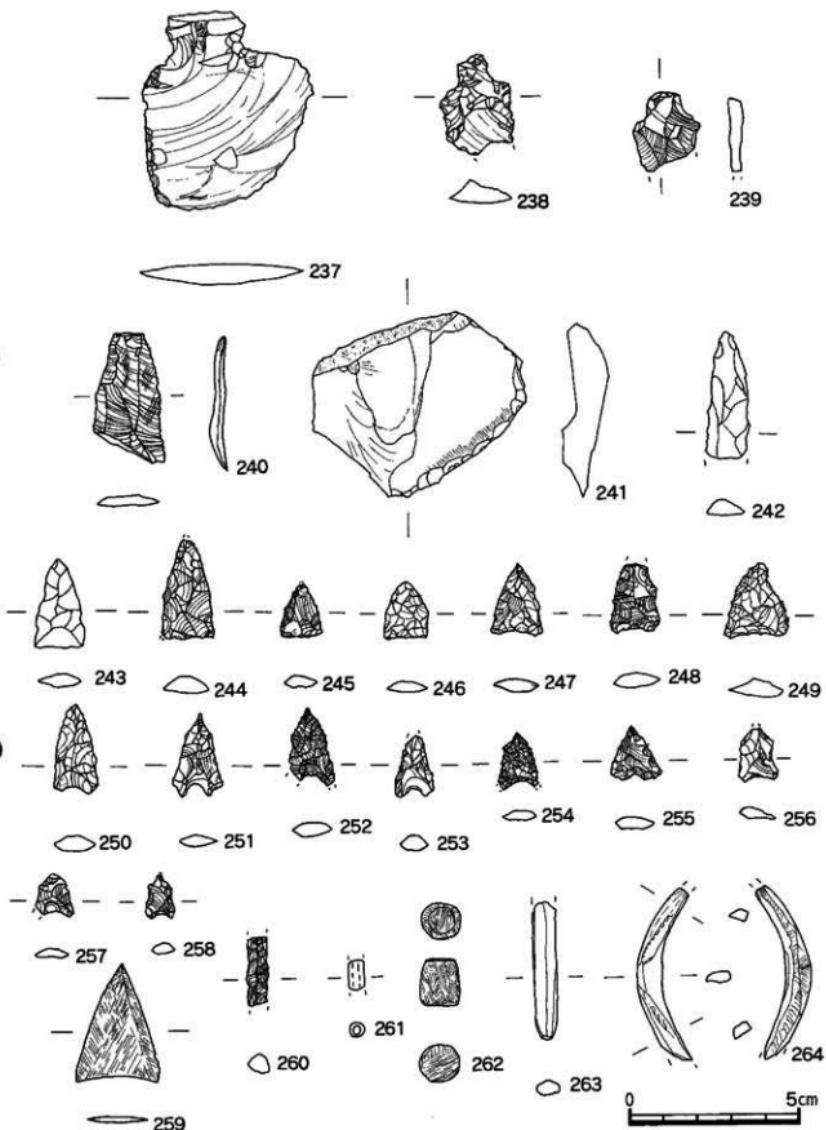
第17図 出土石器実測図2



第18図 出土石器実測図3



第19図 出土石器実測図4



第20図 出土遺物実測図

261は、小型の管玉である。

262は、全面研磨の施された円柱形のものであるが用途は不明である。

C. 骨角器、貝製品（第20図）

263は、骨製の鉛先と思われる。

264は、フネガイ科の貝の螺番の部分を四角に面取りしており、貝輪の一部と思われる。

3. その他の遺物（図版9）

その他の遺物としては、貝塚掘削時に自然遺物が数多く出土している。中でも、貝類、獸骨、魚骨は種類も豊富である。

貝類は、アワビ、アカガイ、スガイ、イシダタミ、レイシ、サザエ、マツバガイ等が多い。

獸骨は、筆者が不勉強のため確實な事は不明だが前回の調査と同様にシカ、イノシシ、アナグマ等が出土していると考えられる。

魚骨についても筆者に知識が無いため判別の出来るものはないが、恐らく前回と同様にタイ類、スズキ、ブリやその他の小魚が出土していると思われる。

第1表 土器観察表

番号	器種	調整		色調		胎土	備考
		内面	外面	内面	外面		
1	鉢	ケンマ	ケンマ	灰黄褐色	灰黄褐色	微小な粒を少量含む	磨消繩文
2	タ	ケンマ	ケンマ	淡褐色	淡褐色	砂粒を含む	タ
3	タ	ケンマ	ケンマ	淡赤褐色	暗褐色	微小な粒を少量含む	タ
4	タ	ケンマ	丁寧なナデ	褐色	褐色	微細な粒を少量含む	タ
5	タ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	黒褐色	黑褐色	微細な粒を含む	タ
6	タ	丁寧なナデ		淡黄褐色	橙色 にぶい褐色	細砂粒を含む	タ
7	タ	丁寧なナデ		灰黄褐色	灰褐色 にぶい褐色	極小の粒を含む	スス付着 磨消繩文
8	タ	丁寧なナデ		茶褐色	茶褐色	細砂粒を含む	磨消繩文
9	タ	丁寧なナデ	ケンマ	褐灰色	淡黄橙色	微細粒を多量に含む	タ
10	タ	丁寧なナデ	ケンマ	褐灰色	灰赤色	極小の粒を多量に含む	貝殻模繩文
11	タ	丁寧なナデ	沈線・刺突	淡褐色	暗褐色	砂粒を含む	
12	タ	貝殻条痕	沈線・ナデ	暗褐色	淡褐色	砂粒を含む	
13	タ	貝殻条痕	沈線・刺突 丁寧なナデ	淡褐色	褐色	細砂粒を含む	
14	タ	ナデ	沈線・刺突 ナデ	淡褐色	暗褐色	砂粒をごく少量含む	
15	タ	沈線・ケンマ	刺突・ケンマ	褐赤褐色	灰褐色	極小の粒を多量に含む	
16	タ	ヨコナデ	沈線	淡褐色	暗褐色	微小な粒を少量含む	
17	タ	ナデ	沈線・刺突 ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	微小な粒を少量含む	
18	タ	ナデ	丁寧なナデ 沈線・竹管	淡灰褐色	淡褐色	微細な粒を多量に含む	
19	タ	貝殻条痕	沈貝殻条痕	淡赤褐色	淡褐色	微小な粒を含む	
20	タ	ナデ	沈線・ナデ	暗褐色	淡褐色	砂粒を含む	
21	タ	ナデ	沈線	灰黄褐色	褐灰色	砂粒を含む	
22	タ	貝殻条痕	沈線・丁寧なナデ 貝殻条痕	黒褐色	黑褐色	砂粒を含む	
23	タ	ナデ	連続刺突 貝殻条痕	褐色	淡褐色	極小の粒を含む	
24	タ	貝殻条痕	沈線・刺突	褐色	褐色	砂粒を少量含む	
25	タ	ナデ	刺突・沈線 ナデ	灰褐色	灰赤色	極小の粒を多量に含む	
26	タ	ナデ	刺突・沈線	褐色	暗褐色	砂粒を含む	
27	タ	ナデ	沈線・刺突 ナデ	褐灰色	淡褐色	砂粒を含む	

番号	器種	調査		色調		胎土	備考
		内面	外面	内面	外面		
28	鉢	ナ デ	沈線・刺突 ナ テ	灰褐色	淡赤褐色	細砂粒を含む	
29	タ	ナ デ	沈線・刺突	灰黄色	暗褐色	砂粒を含む	
30	タ	ナ デ	沈貝殻条痕	淡黄橙色	橙色	砂粒を含む	
31	タ	貝殻条痕	沈線・刺突	淡赤褐色	淡赤褐色	砂粒を少量含む	
32	タ	ナ デ	凹線・ナデ	淡赤褐色	灰褐色	微細粒を微量含む	
33	タ	ケンマ	ケンマ	灰褐色	灰褐色	微小な粒を微量含む	黒色磨研上器
34	タ	ケンマ	ケンマ	黑色	黑色	細砂粒を少量含む	タ
35	タ	ケンマ	ケンマ	灰黄褐色	赤灰色	細砂粒を含む	タ
36	タ	ケンマ	ケンマ	赤灰色	褐灰色	砂粒を含む	タ
37	タ	ケンマ	ケンマ	黑色	灰黄褐色	砂粒を含む	タ
38	タ	ケンマ	ケンマ	灰黄褐色	淡黄橙色	細砂粒を含む	タ
39	タ	ケンマ	ケンマ	黄灰色	淡橙色	砂粒を含む	タ
40	タ	ケンマ	ケンマ	灰褐色	灰黄褐色	砂粒を含む	タ
41	タ	ケンマ	ケンマ	黄灰色	黄灰色	細砂粒を含む	タ
42	タ	ケンマ	ケンマ	褐灰色	褐灰色	微小な粒を含む	タ
43	タ	ケンマ	ケンマ	褐灰色	明褐色	微小な粒を含む	タ
44	タ	ケンマ	ケンマ	黑色	黑色	微小な粒を含む	タ
45	タ	ケンマ	ケンマ	褐灰色	褐灰色	微細な粒を含む	タ
46	タ	ケンマ	ケンマ	淡黄橙色	淡黄橙色	細砂粒を少量含む	タ
47	タ	ケンマ	ケンマ	黑色	黑色	細砂粒を含む	タ
48	タ	ケンマ	ケンマ	灰黄褐色	灰黄褐色	微小な粒をごく少量含む	タ
49	タ	ケンマ	ケンマ	褐灰色	黑褐色	微小な粒を少量含む	タ
50	タ	ケンマ	ケンマ	褐灰色	褐灰色	細砂粒を含む	タ
51	タ	ケンマ	ケンマ	淡橙色	灰黄褐色	細砂粒を含む	タ
52	タ	ケンマ	ケンマ	褐灰色	灰褐色	細砂粒を含む	タ
53	タ	ケンマ	ケンマ	淡黄色	淡黄色	微粒子を多量に含む	タ
54	タ	ケンマ	ケンマ	黑色	黑色	細砂粒を少量含む	タ

番号	器種	調査		色調		胎土	備考
		内面	外面	内面	外面		
55	鉢	ケンマ	ケンマ	褐色	淡赤褐色	微小な粒を含む	黒色磨研土器
56	タ	ケンマ	ケンマ	褐色	褐色	微細粒を多量に含む	タ
57	タ	ケンマ	ケンマ	褐色	灰褐色	細砂粒を含む	タ
58	タ	ケンマ	ケンマ	褐色	褐色	微細粒を多く含む	タ
59	タ	ケンマ	ケンマ	褐色	灰黄褐色	微細粒を多く含む	タ
60	タ	ケンマ	ケンマ	褐色	淡黄橙色	細砂粒を多く含む	タ
61	タ	ケンマ	ケンマ	褐色	褐色	細砂粒を少量含む	タ
62	タ	ケンマ	ケンマ	灰黄褐色	淡黄褐色	微小な粒をごく少量含む	タ
63	タ	ケンマ	ケンマ	黄灰色	灰黄色	微小な粒をごく少量含む	タ
64	タ	ケンマ	ケンマ	淡黄橙色	淡黄橙色	砂粒を含む	タ
65	タ	ケンマ	ケンマ	褐色	灰黄褐色	砂粒を含む	タ
66	タ	ケンマ	格子状沈線	褐色	黑褐色	細砂粒をごく微量含む	タ
67	タ	ナデ	貝殻条痕からナデ	褐色	灰黄褐色	細砂粒を多量に含む	貼付突帯
68	タ	丁寧なナデ	ナデ	赤褐色	褐色	微細粒を多く含む	タ
69	タ	ナデ	ナデ	淡赤褐色	淡赤褐色	細砂粒を含む	タ
70	タ	ナデ	ナデ	橙色	淡褐色	砂粒を含む	
71	タ	ヨコナデ	貝殻条痕からナデ	黑色	黑褐色	砂粒を含む	
72	タ	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒を多量に含む	
73	タ	丁寧なナデ	丁寧なナデ 貝殻条痕	赤灰色	淡赤褐色	砂粒を多く含む	
74	タ	ナデ	貝殻条痕から光ナデ	黑褐色	灰黄褐色	極小の粒を多量に含む	
75	タ	ナデ	ナデ	褐色	褐色	細砂粒を含む	
76	タ	貝殻条痕からナデ	ナデ	黑色	暗褐色	砂粒を含む	
77	タ	貝殻条痕	ナデ	褐色	淡黄橙色	砂粒を含む	突帯状にナデ
78	タ	貝殻条痕	ヨコナデ 荒いナデ	灰黄色	淡黄橙色	砂粒を含む	
79	タ	貝殻条痕	貝殻条痕 からナデ	褐色	灰黄褐色	細砂粒を多量に含む	スス付着
80	タ	貝殻条痕	ナデ	淡褐色	淡褐色	砂粒を含む	
81	タ	ヨコナデ	荒いケンマ	淡褐色	淡橙色	砂粒を含む	

番号	器種	調 整		色 調		胎 土	備 考
		内 面	外 面	内 面	外 面		
82	鉢	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 デ	黒褐色	淡褐色	微小な粒を多く含む	
83	タ	貝殻条痕 ナ	丁寧なナデ	灰褐色	灰褐色	砂粒を多量に含む	
84	タ	ナ デ	ナ デ	淡黄褐色	淡橙色	砂粒を多く含む	
85	タ	ナ デ	貝殻条痕 ナ	暗赤褐色	暗赤褐色	砂粒を多く含む	
86	タ	ナ デ	沈錆・ナデ 貝殻条痕	黃褐色	黃褐色	微小な粒を含む	
87	タ	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	褐色	灰褐色	砂粒を多く含む	
88	タ	ナ デ	丁寧なナデ	灰褐色	淡黄褐色	微細な粒を含む	
89	タ	ナ デ	ナ デ	灰黄褐色	暗褐色	砂粒を含む	
90	タ		貝殻条痕	淡黄褐色	淡橙褐色	砂粒を含む	
91	タ	ナ デ	ナ デ	淡黄褐色	淡黄褐色	砂粒を多く含む	
92	タ	ナ デ	貝殻条痕 ナ	暗灰褐色	淡黄褐色	砂粒を含む	
93	タ	貝殻条痕	貝殻条痕 ナ	黒褐色	灰黄褐色	砂粒を含む	
94	タ	ナ デ	ナ デ	淡黄褐色	淡黄褐色	砂粒を少量含む	
95	タ	ナ デ	貝殻条痕 丁寧なナデ	褐色	灰褐色	細砂粒を含む	
96	タ		ヨコナデ	淡黄橙色	淡黄橙色	細砂粒を多量に含む	
97	タ	荒いナデ	荒いナデ	淡黄褐色	暗褐色	砂粒を含む	貼付突帯
98	タ	貝殻条痕 ナ	ナ デ	灰褐色	淡赤褐色	砂粒を多量に含む	タ
99	タ		貝殻条痕 ナ	灰褐色	淡褐色	砂粒を含む	
100	タ	貝殻条痕 ナ	ナ デ	淡橙色	淡褐色	砂粒を含む	貼付突帯
101	タ	丁寧なナデ	ナ デ	淡黄褐色	淡黄褐色	細砂粒を多量に含む	タ
102	タ	ナ デ	貝殻条痕	淡黄色	淡黄色	砂粒を含む	突帯
103	タ	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	褐色	灰黄褐色	砂粒を含む	貼付突帯
104	タ	ナ デ	貝殻条痕 ナ	淡黄褐色	明黄褐色	砂粒を多く含む	突帯
105	タ	貝殻条痕	貝殻条痕 ナ	淡黄褐色	淡橙色	砂粒を多く含む	タ
106	タ	ナ デ	貝殻条痕	灰黄色	淡褐色	砂粒を多く含む	タ
107	タ	貝殻条痕	ナ デ	淡黄橙色	淡褐色	微小な粒を含む	貼付突帯
108	タ	貝殻条痕	貝殻条痕	淡黄橙色	淡黄橙色	砂粒を含む	穿孔

番号	器種	調 整		色 調		胎 土	備 考
		内 面	外 面	内 面	外 面		
109	鉢	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 デ	淡 橙 色	淡 橙 色	細砂粒を多量に含む	突帯 連續刺突文
110	タ	貝殻条痕		淡 黄 橙 色	淡 黄 橙 色	砂粒を含む	穿孔
111	タ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 赤褐 色	淡 赤褐 色	砂粒を含む	
112	タ	丁寧なナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 橙 色	褐 灰 色	細砂粒を含む	
113	タ	貝殻条痕 ナ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 極 色	淡 赤褐 色	砂粒を含む	
114	タ	貝殻条痕	貝殻条痕	淡 赤褐 色	淡 赤褐 色	砂粒を含む	
115	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 赤褐 色	淡 赤褐 色	微小な粒を多く含む	
116	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 極 色	褐 色	微小な粒を少量含む	
117	タ	ヨコナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 極 色	淡 極 色	砂粒を少量含む	
118	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 極 色	淡 極 色	微小な粒を少量含む	
119	タ	貝殻条痕	貝殻腹縁文	淡 赤褐 色	淡 極 色	砂粒を多く含む	
120	タ	貝殻条痕	貝殻腹縁文	褐 色	淡 橙 色	微細粒を多量に含む	
121	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 黄 橙 色	淡 橙 色	砂粒を含む	
122	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 橙 色	淡 赤褐 色	極小の粒を多く含む	
123	タ	貝殻条痕	貝殻腹縁文	暗 極 色	褐 色	砂粒を含む	
124	タ	貝殻条痕	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	明 赤褐 色	淡 赤褐 色	砂粒を含む	
125	タ	丁寧なナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 赤褐 色	淡 赤褐 色	微小な粒を多量に含む	
126	タ	ナ デ	貝殻腹縁文 丁寧なナ デ	淡 橙 色	淡 灰 黄褐 色	砂粒を含む	
127	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 赤褐 色	灰 褐 色	砂粒を含む	
128	タ	ナ デ	貝殻腹縁文	淡 橙 色	淡 橙 色	砂粒を含む	
129	タ	ナ デ	貝殻腹縁文	褐 色	淡 極 色	微小な粒を少量含む	
130	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 赤褐 色	淡 赤褐 色	砂粒を含む	
131	タ	貝殻条痕	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 極 色	淡 赤褐 色	砂粒を含む	
132	タ	貝殻条痕	貝殻腹縁文	淡 極 色	淡 極 色	砂粒を含む	
133	タ	丁寧なナ デ	貝殻腹縁文	褐 色	淡 極 色	微小な粒を少量含む	
134	タ	ナ デ	ナ デ · 沈 線 貝殻腹縁文	淡 赤褐 色	灰 赤 色	砂粒を含む	
135	タ	ナ デ	沈 線 貝殻腹縁文	淡 橙 色	淡 極 色	微小な粒を含む	

番号	器種	調 整		色 調		胎 土	備 考
		内 面	外 面	内 面	外 面		
136	鉢	貝殻条痕	貝殻腹縁文	淡黄褐色	淡黄褐色	砂粒を少量含む	
137	々	ナ デ	貝殻腹縁文	赤褐色	淡赤褐色	砂粒を少量含む	
138	々	貝殻条痕	ナ デ 貝殻腹縁文	淡褐色	淡褐色	微小な粒を少量含む	
139	々	ナ デ	貝殻腹縁文	灰褐色	淡褐色	砂粒を含む	
140	々	貝殻条痕	貝殻腹縁文	橙色	淡橙色	微細粒を多量に含む	
141	々	ナ デ	竹管状直文具による 連続刺突文、ナテ	淡褐色	褐色	砂粒を少量含む	
142	々	ナ デ	竹管状直文具による 連続刺突文	淡褐色	淡黄褐色	砂粒を含む	
143	々	广寧なナデ	竹管状直文具による 連続刺突文	淡橙色	褐色	砂粒を含む	
144	々		竹管状直文具による 連続刺突文	淡赤褐色	淡赤褐色	砂粒を少量含む	
145	々	ナ デ 貝殻条痕	沈 線	淡褐色	灰褐色	極小の粒を含む	
146	々	貝殻条痕	短 沈 線	淡褐色	淡褐色	微小な粒を少量含む	
147	々	ナ デ	短 沈 線	淡褐色	淡褐色	精良	
148	々	ナ デ	平行沈線による 幾何学文	明褐色	淡赤褐色	砂粒を少量含む	
149	々	ナ デ	複合沈線文	灰黄褐色	淡黄褐色	砂粒を含む	
150	々	ナ デ	複合沈線文	赤褐色	暗赤色	繊維を少量含む	
151	々	ナ デ	一部貝殻条痕	淡褐色	黑褐色	砂粒を含む	組織痕土器
152	々	貝殻条痕		淡黄褐色	黄褐色	微小な粒を少量含む	々
153	々	ナ デ		灰色	暗灰色	砂粒を含む	々
154	々			黑褐色	暗褐色	微小な粒を含む	々
155	々	ナ デ		褐色	明褐色	砂粒を少量含む	々
156	々			橙色	橙色	砂粒を含む	々
157	々	貝殻条痕	ナ デ	明褐色	淡褐色	微小な粒を含む	組織痕土器 側代底
158	々	ナ デ	ナ デ	橙色	橙色	砂粒を含む	
159	々	ナ デ	ナ デ	橙色	淡褐色	微小な粒を少量含む	
160	々	ナ デ	ナ デ 貝殻条痕	淡黄橙色	淡褐色	砂粒を含む	
161	々			赤橙色	赤橙色	微小な粒を多量に含む	
162	々	ナ デ		灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒を含む	

番号	器種	調整		色調		胎土	備考		
		内面	外面	内面	外面				
163	鉢	ナ	デ	ナ	デ	黒 色	橙 色	砂粒を含む	
164	タ	ナ	デ			明 橙 灰 色	灰 白 色	砂粒を含む	
165	タ	ナ	デ	ナ	デ	黒 色	淡 黄 橙 色	砂粒を少量含む	
166	タ	ナ	デ	ヨコナ	デ	淡 黄 橙 色	淡 黄 橙 色	微小な粒を多量に含む	
167	タ	ナ	デ	ヨコナ	デ	灰 白 色	淡 黄 橙 色	砂粒を含む	
168	亮	ナ	デ	刷 毛		淡 橙 色	淡 橙 色	砂粒を含む	弥生
169	高 坏	ナ	デ	ナ	デ	淡 橙 色	淡 橙 色	砂粒を多く含む	弥生
170	坏 薔	ナ	デ	ナ	デ	灰 色	黄 灰 色	砂粒を含む	須恵器
171	タ	ナ	デ	ナ	デ	灰 色	灰 色	砂粒を含む	タ
172	タ	ナ	デ	ナ	デ	灰 色	灰 黄 色	微小な粒を多く含む	タ
173	高 坏	ナ	デ	ナ	デ	灰 黄 色	暗 灰 色	微小な粒を含む	
174	土器片錘	ナ	デ	貝殻 条 痕		灰 黄 色	淡 黄 橙 色	砂粒を多量に含む	
175	土器片製盤	ナ	デ	貝殻 条 痕		淡 赤 橙 色	淡 赤 橙 色	砂粒を含む	

第2表 石器觀察表

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
176	石斧	16.0	6.3	4.8	790	安山岩	
177	々	10.0	5.5	3.0	228	々	
178	々	11.8	5.3	2.0	190	々	
179	々	9.8	5.5	3.45	242	々	
180	々	7.3	4.4	2.2	90	々	
181	々	9.2	3.7	1.1	50.13	泥岩	
182	々	8.2	5.3	1.7	90.68	頁岩	
183	々	10.1	4.85	2.2	132	々	
184	々	8.95	4.3	1.35	77.36	々	
185	々	8.75	4.6	1.4	83.47	安山岩	
186	々	10.9	5.2	2.0	144	泥岩	
187	々	7.5	4.3	1.46	47.98	々	
188	々	8.4	7.5	1.25	95	々	
189	異形石器	14.2	9.1	4.1	555	頁岩	
190	々	10.4	7.1	4.0	330	安山岩	
191	々	9.7	7.25	3.7	360	々	
192	々	8.7	8.5	2.65	220	頁岩	
193	叩き石 磨石	8.9	8.0	4.5	370	々	
194	々	9.0	9.0	1.5	200	砂岩	
195	石鍤	6.45	4.75	1.3	68.86	泥岩	
196	々	5.9	4.0	2.62	83.72	砂岩	
197	々	7.35	3.5	2.1	90	泥岩	
198	々	6.35	6.45	2.7	138	砂岩	
199	々	4.6	4.2	1.6	45	々	
200	々	5.4	5.1	2.5	60	々	
201	々	5.3	5.2	1.6	70	々	
202	々	6.1	5.6	1.5	73.7	々	
203	々	6.4	6.2	1.2	90	頁岩	
204	々	8.4	5.6	1.8	145	々	
205	々	6.8	6.5	2.6	180	砂岩	
206	々	7.9	7.3	2.4	188	々	
207	々	7.0	6.9	2.5	200	々	
208	々	9.3	7.4	2.2	210	々	
209	々	9.5	7.4	2.0	230	々	

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
210	石錐	9.1	8.5	2.9	312	砂岩	
211	タ	9.1	8.6	3.1	335	タ	
212	タ	11.3	7.7	2.7	360	タ	
213	タ	9.9	10.9	2.6	370	タ	
214	タ	9.5	8.8	3.3	390	安山岩	
215	タ	10.0	10.5	3.9	540	砂岩	
216	タ	11.3	8.1	4.0	560	タ	
217	タ	13.3	8.7	3.0	570	タ	
218	タ	21.6	30.7	6.4	6000	タ	
219	凹石	6.3	5.4	3.1	140	タ	
220	タ	5.9	5.7	2.5	120	タ	
221	タ	6.9	6.6	2.7	170	タ	
222	タ	9.15	5.4	3.7	238	タ	
223	タ	9.6	6.9	3.5	285	タ	
224	タ	9.75	9.6	5.0	552	タ	
225	タ	13.35	11.4	6.7	1285	タ	
226	タ	12.8	10.2	4.5	958	タ	
227	タ	11.65	10.0	4.65	700	タ	
228	タ	12.2	9.05	4.95	845	タ	
229	タ	14.8	8.5	4.2	860	タ	
230	磨石	9.55	8.2	3.4	320	タ	
231	タ	11.5	9.7	3.9	600	タ	
232	タ	9.5	8.3	3.9	480	安山岩	
233	台石	11.1	17.3	4.1	1100	砂岩	
234	タ	22.5	12.9	6.8	2500	タ	
235	砥石	20.4	11.8	8.8	4000	タ	
236	タ	19.9	10.3	8.9	2500	タ	
237	石匙	5.8	4.9	0.7	17.74	チャート	
238	タ	2.9	2.0	0.6	2.68	黒曜石	
239	タ	2.2	1.9	0.45	1.74	タ	
240	剥片	3.8	2.1	0.4	2.85	タ	
241	サイドスライバー	6.2	5.15	1.45	41	チャート	
242	筋先状尖頭器	3.75	1.2	0.4	2.5	泥岩	
243	石錐	2.6	1.55	0.4	1.11	タ	

番号	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
244	石 錐	2.9	1.55	0.5	2.18	チャート	
245	タ	1.65	1.25	0.35	0.68	タ	
246	タ	1.65	1.3	0.3	0.74	タ	
247	タ	2.1	1.5	0.4	1.21	タ	
248	タ	2.05	1.45	0.45	1.12	タ	
249	タ	2.2	1.6	0.5	1.69	タ	
250	タ	2.45	1.3	0.45	1.23	タ	
251	タ	2.1	1.5	0.35	0.82	タ	
252	タ	2.3	1.2	0.4	1.07	タ	
253	タ	1.6	1.1	0.4	0.67	タ	
254	タ	1.7	1.2	0.3	0.47	黒曜石	
255	タ	1.55	1.5	0.35	0.67	タ	
256	タ	1.6	1.15	0.3	0.61	チャート	
257	タ	1.2	1.1	0.25	0.31	タ	
258	タ	1.2	0.85	0.3	0.62	タ	
259	タ	3.5	2.45	0.2	1.72	粘板岩	
260	石 錐 ?	2.0	6.05	0.6	1.05	黒曜石	
261	管 下	0.9	0.45	0.1	0.3	碧玉	
262	不明	1.4	1.0	1.0	2.64	碧玉 ?	

第3表 その他観察表

番号	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	材 質	備 考
263	鉛 先	4.05	0.65	0.5	1.52	骨	
264	貝 輪	5.1	0.75	0.35	2.27	貝	

第3章 青島歴史文化の広場の整備

1. 整備の概要

青島歴史文化の広場は、昭和58年10月の青島観光開発協議会報告書、昭和61年11月の青島地域観光開発構想等をはじめとする青島再開発構想の中で、松添貝塚を活用した公園とイベント等のできる多目的広場の整備が提言されてきた。

そのなかで、宮崎広域土地区画整理事業「青島シーガル土地区画整理事業」が施工されることにより、これらの提言を生かす形で当該用地の先行取得を行い、区画整理事業用地の減歩後、不足する分は保留地として買い上げ、多目的広場と歴史的公園を併せ持つ歴史文化の広場としての一的な整備を計画した。

平成7年度は、区画整理事業としての宮崎広域土地区画整理事業「青島シーガル土地区画整理事業」が終了することから、リゾート推進室が「青島歴史文化の広場」の担当課として用地取得や基本構想の策定を行った。基本構想の策定に当たり、リゾート推進室、区画整理事業課、都市計画公園課、文化振興課、コンサルタント会社と協議を行い、平成8年度に実施設計を行い、平成9、10年度に貝塚等の埋蔵文化財の発掘調査を行うと共に設計変更を行いながら公園整備を行うこととした。

平成9年度は、宮崎市の機構改革に伴い担当課が変更されると共に、事業計画の見直しも行われた。リゾート推進室に替わり観光課、都市計画公園課に替わり街路公園課が担当課となり、文化振興課と合わせて3課での対応となり、事業計画は、平成9年度内の事業完了で平成10年度上半期の開園と変更された。これに伴い公園の施工が早まり、9月から予定していた埋蔵文化財の発掘調査よりも公園造成が先行したため、支障を来す可能性のある部分は立ち会いを行いながらの工事を行った。

基本構想では、松添貝塚の保存を核として、エントランス広場、多目的広場、古代広場、花畠の広場、青島古墳と既存樹林とに施設計画を行った。しかし、歴史公園の中心となる松添貝塚と青島古墳の調査と展示復元には時間がかかるため、実施設計の段階で松添貝塚の展示に絞る事となった。

基 本 構 想 (抄)

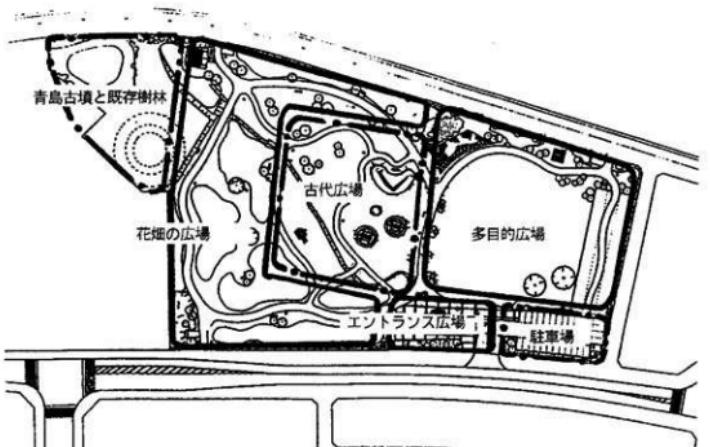
基本理念

歴史と文化のかおる「やすらぎ」と「ふれあい」の広場づくり

(仮称) 青島歴史文化の広場整備の基本理念は、松添貝塚等の歴史的文化資源の保存と活用との両立を図りつつ、青島地域の歴史や文化とのふれあいや、レクリエーション活動、イベント活動等を通して、市民、リゾート客等が「うるおい」と「やすらぎ」を満喫し、気軽に「つどい」、「ふれあう」ことのできる広場づくりを目指すことである。もって、青島リゾートの永続的な発展と快適な環境の創造を図る。

施設配置計画

基本理念及び基本方針を踏まえ、前項の施設の整備内容に従って、現況の地形、動線等を考慮して施設配置計画を行う。施設配置の概況図及び計画図は次図に示すとおりである。



●施設配置概況図

2. 貝塚の整備

1 貝層の剥ぎ取り

貝塚は当初貝層を確認した後に、1辺2mの縦穴を掘り込み壁面を薬品処理で固め、覆い屋を建てる予定であったが、現地は予想よりも水引が悪いため雨の後は水が溜まり幼児には危険な状態になること、排水溝を入れるには勾配が足りないことが判明したため発掘状態での貝層展示は諦めることになった。そのため、貝層を剥ぎ取った後に近くの別の場所に覆い屋を設け、その内部に再現展示することとした。

貝層剥ぎ取りは、縦穴壁面を直に切り、樹脂を塗布しガーゼ、寒冷紗を貼り更に樹脂を塗り込んで乾燥させた。乾燥後はガーゼにレベルを記入しパネルサイズにカットして搬出した。

展示パネルは、搬出した貝層を水洗し樹脂による表面強化を行い、別途製作した1辺1.5mのステンレス製のパネルに貼り付けている。この際に、搬出時や貼り付け時に損傷した貝を取り替えている。

展示する際には、コの字状のコンクリート擁壁の内面にパネル自体を接着させ、パネルとパネルの隙間を埋め込み、擁壁の外側には砂を貼り付けている。

2 展示施設

展示施設は、パネル設置擁壁と覆い屋がある。工期が短かったため同時進行の形になった。

擁壁は、基礎碎石15cm、基礎20cm、高さ1.8mの鉄筋コンクリート製で、コの字型をしており、奥壁の一部を斜面に埋め込んでいる。

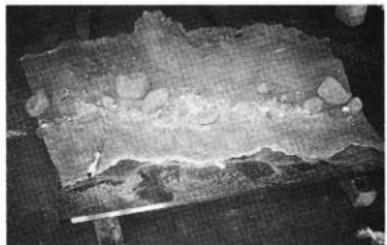
覆い屋は、日差し、雨、風を遮けることを主目的に、短辺3m、長辺4mの長方形で屋根までの高さが3mあり、1m程の斜面を跨ぐ形となっている。



貝層剥ぎ取り



ステンレスパネル作成



剥ぎ取り貝層整形



展示パネル完成



展示施設施工前



展示施設工事中



擁壁完成



展示施設完成



展示パネル取付工事

3. その他

1 青島古墳

青島古墳は宮崎県指定史跡であるが、実態が不明確なものであったが、今回の青島シーガル土地地区画整理事業により現状が把握された。指定時では6ヶ所地番指定されているが地境が接するものが多く、実際の基数は不明である。現状では、西側の杉林の中の1基が確かなもので広場内の1基（2号）は地番と組合わさった板石から古墳と推定されるが、時間がなく確認調査は行っていない。その他の地番では、古墳と思われる遺構等は確認されなかった。

公園内の2号は、発掘調査が出来なかつたため、整備は行つてない。公園整備に当たつては、周囲が芝生貼りになるため敢えて石組から周間2m程を地山露出させて古墳の位置表示とした。

2 積穴式住居

復元住居として積穴式住居を2基、円形プランと方形プランのものを約1／2で建設している。現地は吹きさらしであり台風の際の屋根の強度に不安があることと市内には既に蓮ヶ池史跡公園内に復元住居があることから、骨組みだけの復元としている。

3 東屋

東屋は、次の3種類を建設している。

- (1) 管理倉庫併設のもの
- (2) ベンチのみのもの
- (3) 高床式の展望所のもの

4 案内板

案内板は、次の2種類を設置している。

(1) 総合案内板

エントランス広場に設置し、家形で四面表示を行い、各々、

青島歴史文化の広場案内図、

青島地区のリゾート、

青島地区的自然、

青島地区的歴史と文化

を説明している。

(2) 入口案内板

エントランス以外の入り口に設置したもので、青島歴史文化の広場案内図である。

5 説明板

説明板は、次の2種類を設置している。

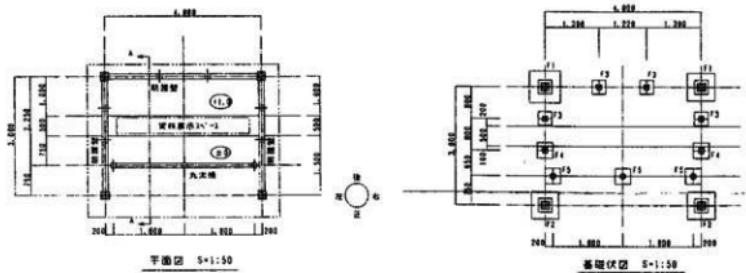
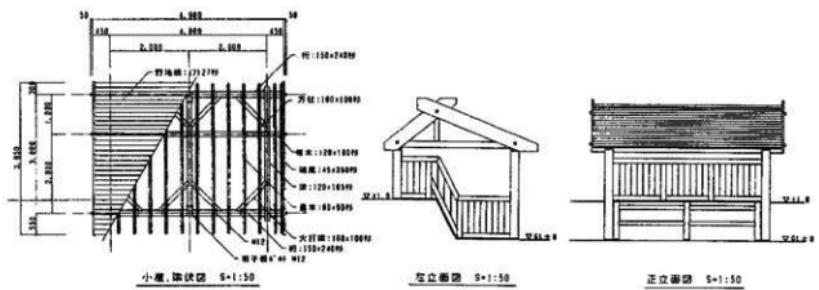
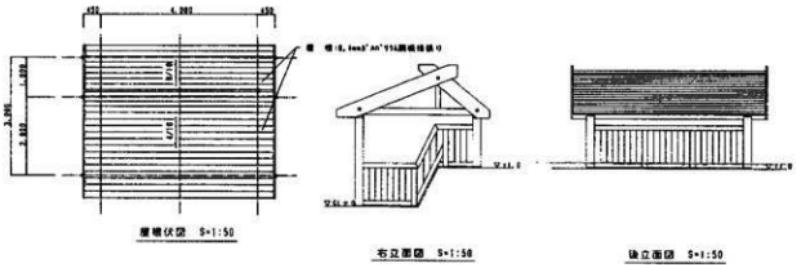
(1) 貝塚、積穴式住居説明板

説明板を斜めに寝かし、屋根などのないもの。

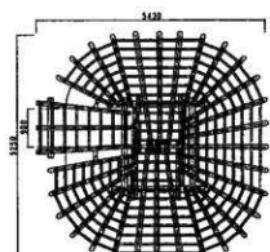
(2) 青島古墳説明板

入り口案内と同一構造のもの。

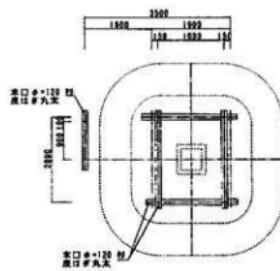
图 瑞 展 示 场



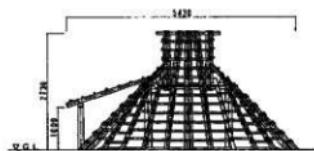
古代住居（竖穴住居）



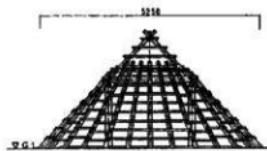
平價四 8•1/50



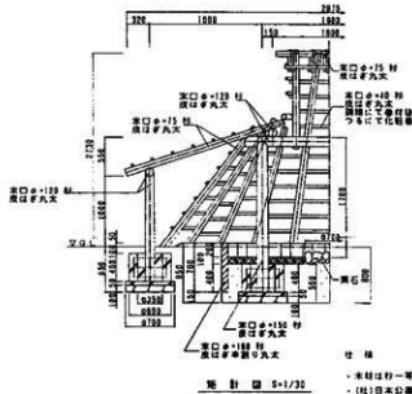
三 伏 ④ S=1/50



立 圖 四 S-1/50



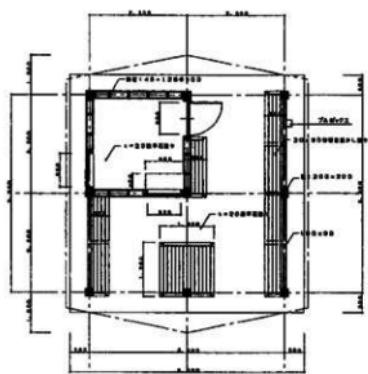
立 國 圖 S-1/50



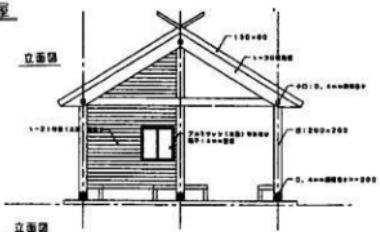
- ・本社は特一等材とし、専用調整後CCPA2号油圧注入処理を施す。
- ・(社)日本公害施設設備の生産物種置換に投入した製品とする。

古代 船風東屋

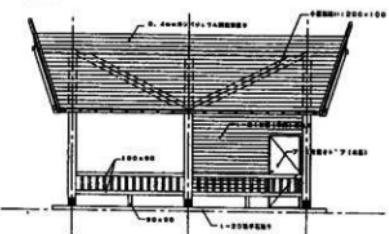
平面図 S-1/50



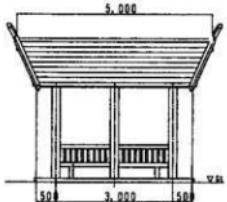
立面図



立面図

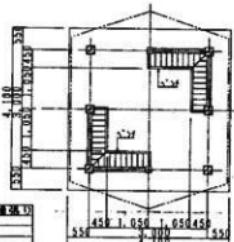


立面図



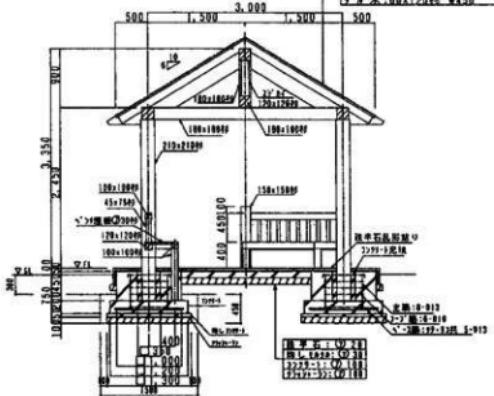
立面図 1/10

平面図 1/50

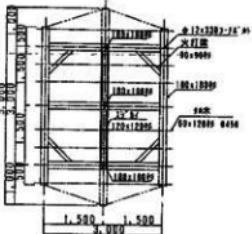


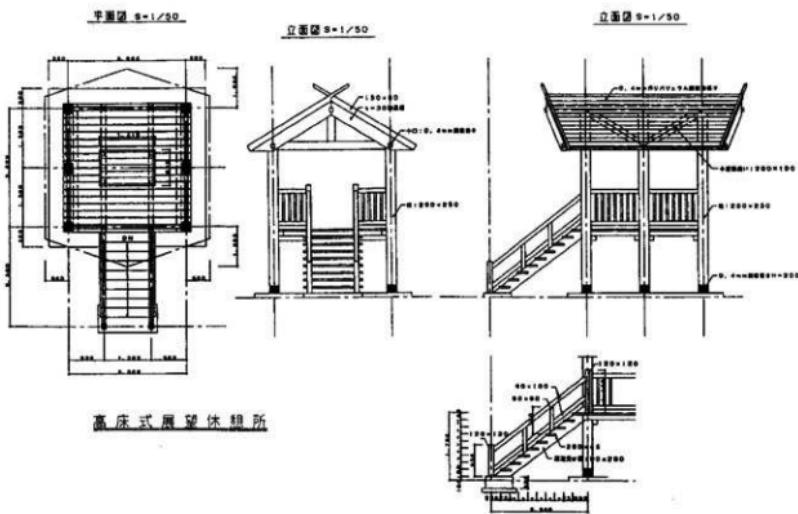
断面図 1/20

上段	下段
1.50	1.50
1.50	1.50
1.50	1.50
1.50	1.50

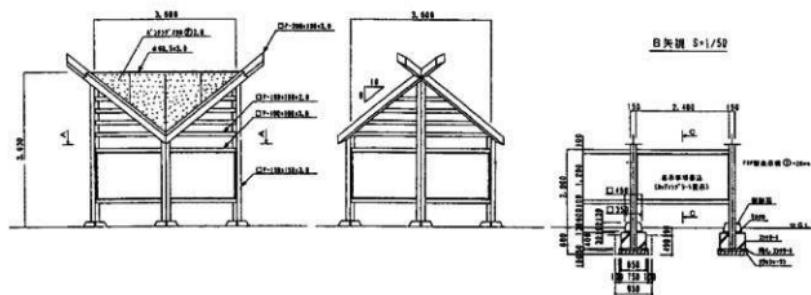
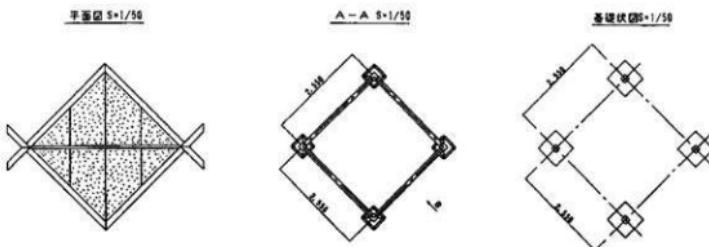


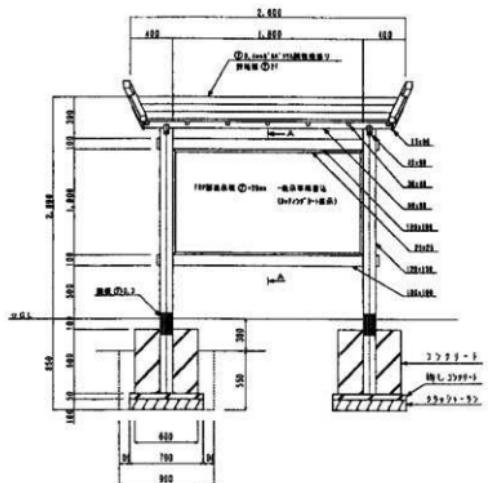
小屋式屋根 1/50





室内板B(総合)(4方向表示タイプ)

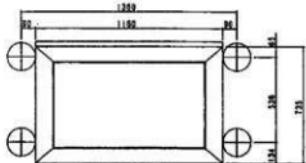




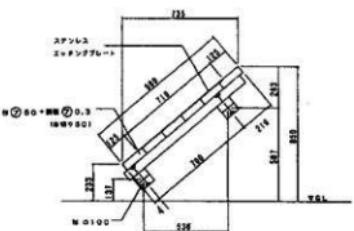
平面圖

說明板

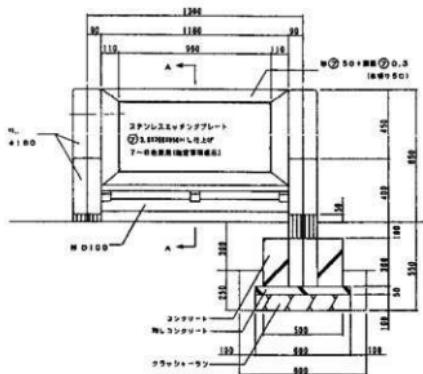
- A 款面單



立西四



立面 ⑤





公園全景



貝層展示狀況



青島古墳



竪穴式住居



東屋 1



東屋 2



東屋 3



総合案内板



案内板



案内板



案内板



案内板



入口案内板



説明板 1



説明板 1



説明板 2

第4章 まとめ

1. 出土土器について

平成9年度の調査についてはその調査面積、遺構の少ない点、出土状況の悪い点はあるが、土器の出土内容に注目されるものがあった。土器はその大半を砂と岩の混じった旧海岸線と思われる所から出土しており、一種の土器溜まり的な状況を呈している。

出土した土器は、外来系の磨消繩文土器、黒色磨研土器、研磨（ナデ）土器、在地の貝殻文土器、そして突帯文土器がその中心を成している。磨消繩文土器は西平式から三万田式に及ぶものと思われ、黒色磨研土器はその器形から黒川式（古開式）に相当すると思われる。また研磨（ナデ）土器も蝶ネクタイ状の貼り付け文から黒川式に相当すると思われる。このことは、後期の後半から晩期前半にかけてのうち、黒色磨研土器としては古いタイプの三万田式から御領式に掛かる時期が欠落していると考えられる。

貝殻文土器については口縁部の肥厚する文様帶に特徴のある市来式土器が見られず、市来式土器のなかでも最も後出すると言われている逆「く」の字となる口縁部に文様を施すものが見られる。また、口縁部に屈曲が見られずに貝殻腹縁文が施される、以前に黒川式土器に併行する松添式と呼称された土器が出土している。この2種類の土器は、市来式の口縁端文様帶から肥厚した口縁部文様帶、そして逆「く」の字となる口縁部への施文と云う形態変化の流れに対し、松添式の直線的な口縁部と胴部や口縁下部の貝殻腹縁文の連続は市来式土器の変化の延長上にあると考えられる。すると、後期の後半から晩期前半にかけて在地土器の連續性と外来系土器の非連續性が問題となる。このことは、平畠遺跡の報告書において指摘されているが、南九州では典型的な三万田式土器が少なく、西平式土器の形態が三万田式期以降まで残る可能性があることを傍証するものに見える。この状況は単に調査面積の狭さによるものと考えられるが、今回調査区における土器の連續性、隣接する松添遺跡の出土状況（附記）は上器型式毎にブロックを形成し西から市来式土器、三万田式土器、松添式土器、貝塚隣接部に黒色磨研土器と大きく分けられる点からも特定時期の土器の欠落は偶然とは考え難い。更に、高千穂町の陣内第2遺跡においては、三万田式土器は黒色磨研土器と無文研磨（ナデ）で頸部が強く締まる深鉢とがセットで出土しており、松添遺跡の三万田式土器が黒色磨研土器が見られずに無文で荒い研磨（ナデ）の深鉢が多量に出土している点と大きな相違を示している。また、宮崎平野における三万田式期には、市来式土器以来の貝殻条痕に依る器面調整に貝殻腹縁文を施す深鉢と荒い研磨（ナデ）に貝殻腹縁文を施す深鉢が存在すると考えられる。これは西平式に併行する時期以降に、本書で沈線文土器とした一群の鉢形土器が、外来の磨消繩文土器の器形と在地の貝殻腹縁文土器（主に市来式土器）や貝殻条痕調整との融合した土器形態（外来の器形に在地の施文・調整を施すもの）を持つことからも想像される。更に、後期中葉以降磨消繩文土器は鉢形土器で在地の土器は深鉢形土器でお互いを補完しセット関係を成すことも重要な要素である。鉢形土器における磨消繩文土器の採用と黒色磨研土器の前半期（三万田式・御領式土器）の不採用、黒川式における採用は宮崎平野部の文化の受容の在り方を示すものとして興味深い点であり、磨消繩文土器の時期は瀬戸内以東の影響下にあり、九州的な黒色磨研土器につ

いては黒川式期に漸く受け入れたようであるが、この時期には新たに貝殻条痕に依る粗製深鉢が出現している。また、刻目の無い突帯文の深鉢の出現が同時期であるのか一時期下がるのかは不明だが、北部九州若しくは瀬戸内の影響を受けていると考えられ、ここにおいて、突帯文土器は貝殻腹縁文を施されておらず、これまでの南九州の土器施文の原則を外れるようになつておらず、西日本の突帯文土器の流れに乗ったためと考えられる。

本遺跡は、夜白式土器以降弥生時代の遺物は殆ど見られず、居住地等としての丘陵利用がなくなったと思われる。

2. 公園整備について

公園整備として貝塚部分の保存に重点を置き貝塚の展示を行う事でその意味を解説する予定であったが、現実には問題点が多かった。

貝塚部分の保存に就いては、整備予定が1年繰り上がったため貝塚範囲の確認が出来ずに工事の際に影響がありそうな部分に立会うだけでの確認のため依然として推定範囲でしか示せない最低限での保存処置であり、貝塚包含推定部分に就いては1m程度の盛土を施し芝生を貼つたため、公園内でもあり今後の学術調査等を困難にしてしまった。

貝塚の展示に就いては、当初地面を掘り下げ壁面を固定して展示する予定であったが、壁面固定方法、排水方法、覆い屋を架けた際の展示（人の導線）の問題等が難しく時間的余裕もなく諦める事となった。

実際に行った貝層剥ぎ取り法は、2層の貝層や貝層の傾斜が見やすい利点はあるが、中に浮いた作りもののような印象を与える事も否めない。また、今回はコの字の擁壁にしたため坪掘りの印象はあっても屋外展示としては見辛いので、側壁はハの字に広げるべきであったと考えている。

最も残念な事は、松添貝塚、松添遺跡という1ヶ所での出土遺物を全く展示する施設がない点である。

コンテナ数千箱の膨大な遺物の極一部を展示する事で、縄文時代の土器製作技術、多様な施文方法のすばらしさを示し、南九州と中九州、瀬戸内地方との交流を表し、土器の型式変化までも見て取れる機会を逸したことは、大変残念である。

公園の展示として宮崎層群の露頭に説明を加える事で鬼の洗濯岩の説明を加える積もりであったがこれも取りやめになった。

青島古墳についても草をむしるだけで実態を明らかに出来なかった。

公園自体は、単なる広場と花畠の組み合わせであり、広場は遊び場所としては良いのだろうが周囲に日陰を作れる木がなく休憩する場所が少ない事、花畠は定期的な植え換えが必要なうえベンチ等はあるがやはり木陰等がなく一休みするのに不便さを感じるようである。東屋は数ヶ所に作られているがそれだけでなく、小型の屋根付きベンチや枝張りの良い木が必要である。

広場にある舞台に就いては初めは土舞台であったのが波状岩のイメージと云うことで板石の組み合わせに変更されたが、場違いの感がある。

以上、公園に付いて利用する際に感じる不便を書いたが、今後の史跡整備に生かす必要を感じている。

最後になりましたが、雨が降れば水没しポンプで水汲みしながら発掘調査を行ってくださった作業員の皆様、宮崎では10年ぶりの奥のなか貝層剥ぎ取りをして頂いた近畿ウレタンの方々、短い工期の中相次ぐ設計変更に対応して頂いた公園施工業者の皆様に心から感謝申し上げます。

〈参考文献〉

- 埋蔵文化財調査研究報告Ⅰ 隣内第2遺跡 蓮ヶ池横穴群 1987.3 宮崎県総合博物館
埋蔵文化財調査研究報告Ⅳ 下丹田遺跡 1991 宮崎県総合博物館
宮崎縣文化財調査報告書 第二輯 昭和三十二年三月 宮崎県教育委員会
松添貝塚 発掘調査報告書 宮崎市文化財調査報告書 第2集 1974 宮崎市教育委員会
宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集 1985 宮崎県教育委員会
宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集 1988 宮崎県教育委員会
縄文土器大観 1 1986 小学館
日本上器事典 1996 雄山閣

図版1
調査状況1

1 トレンチ



2 トレンチ



3 トレンチ



図版 2
調査状況 2

調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



貝層検出状況



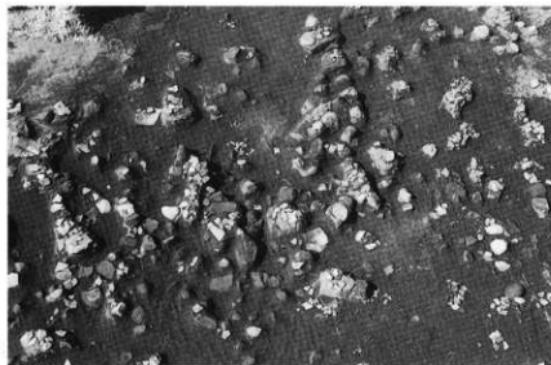
図版 3
調査状況 3



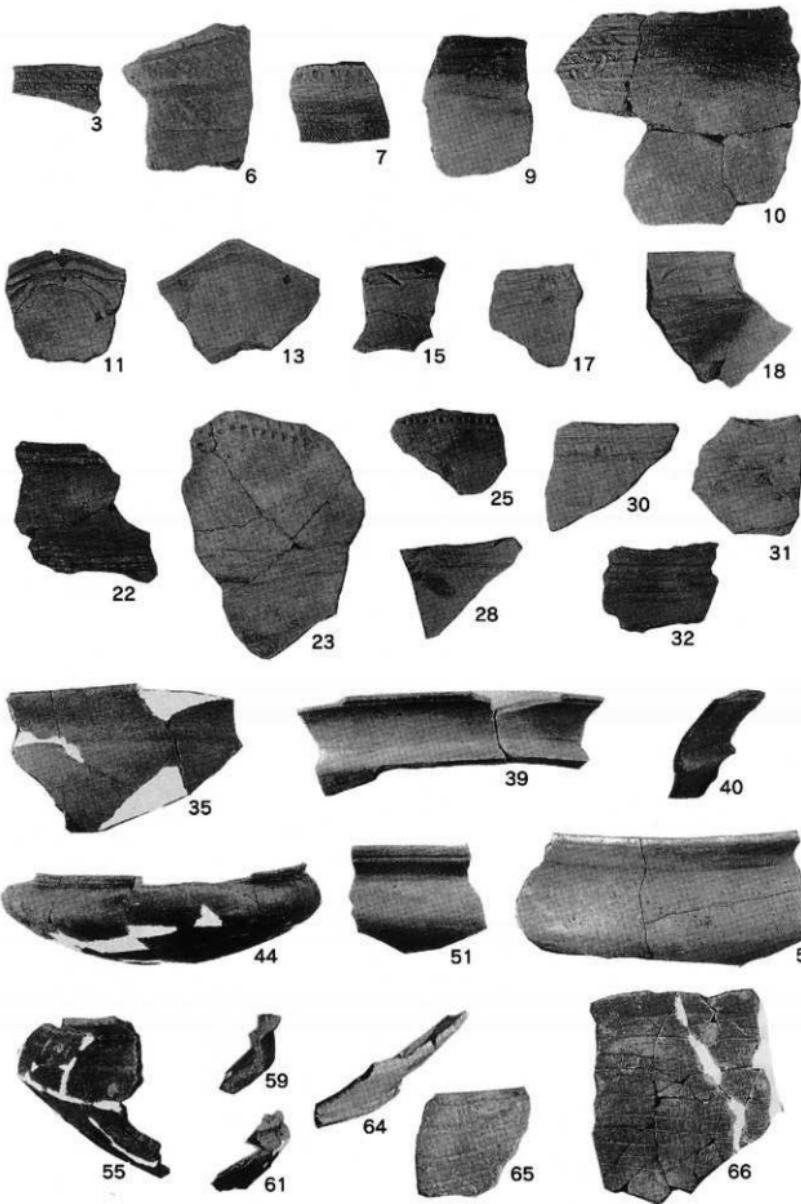
配石状遺構



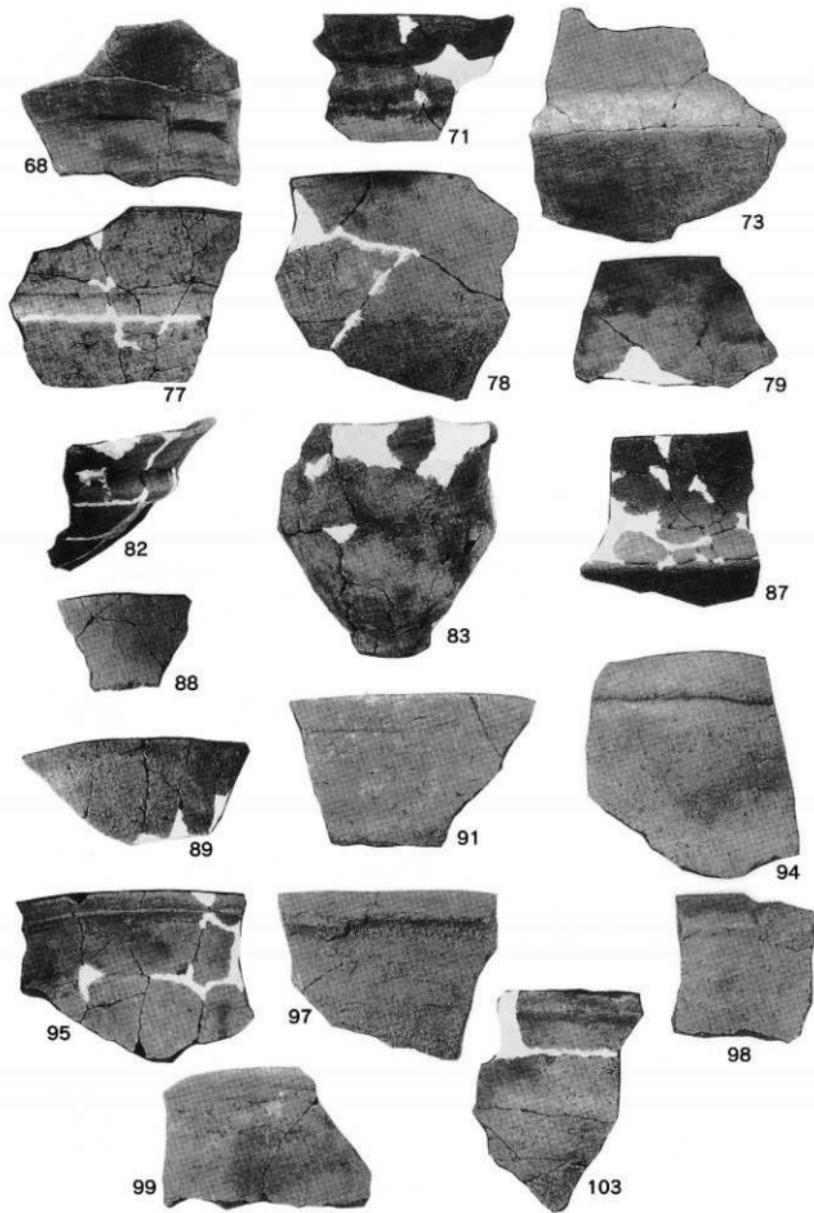
土器出土状況



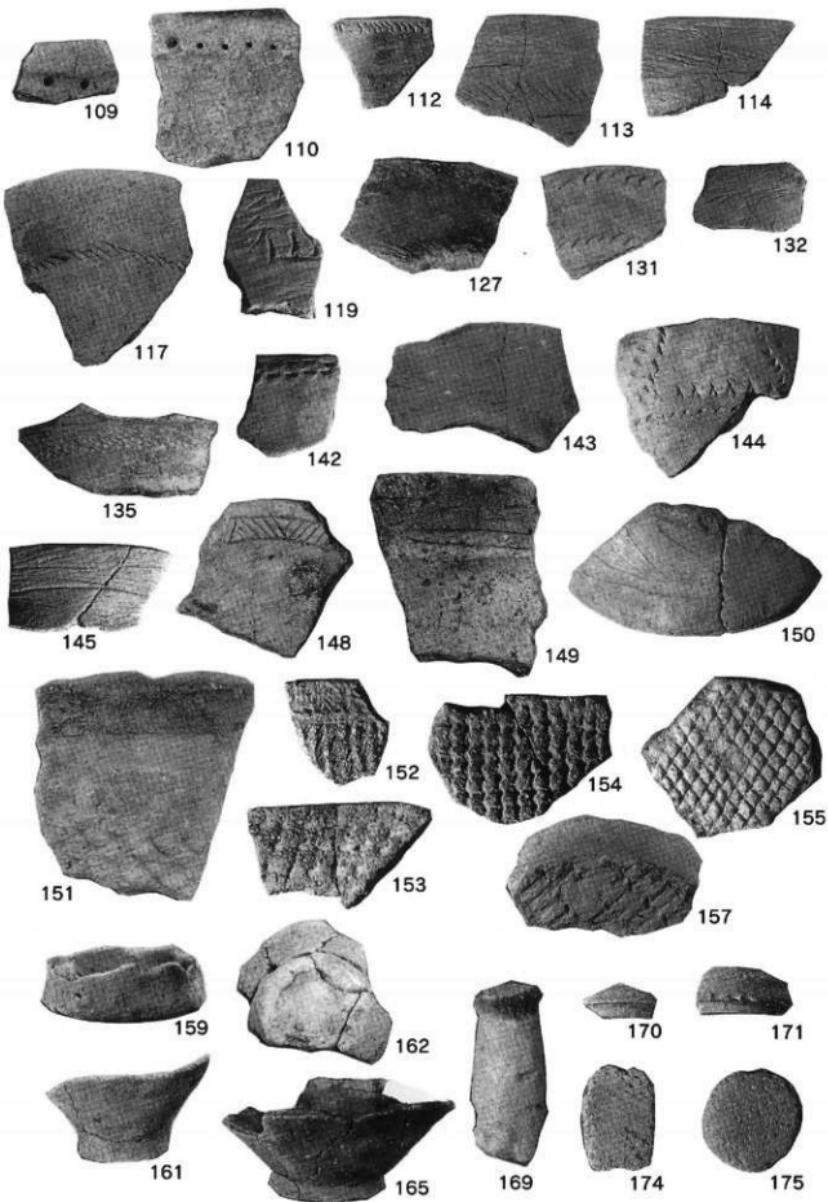
土器出土状況



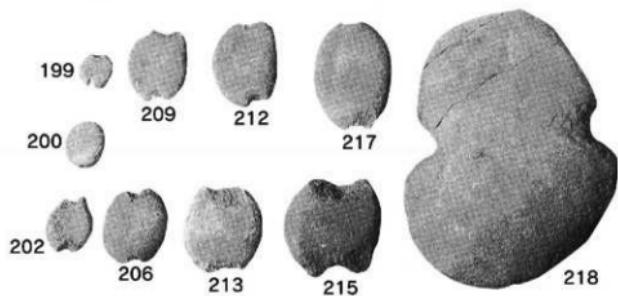
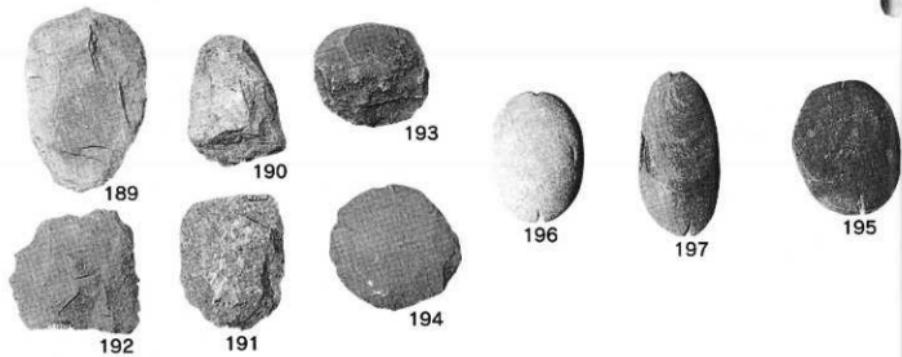
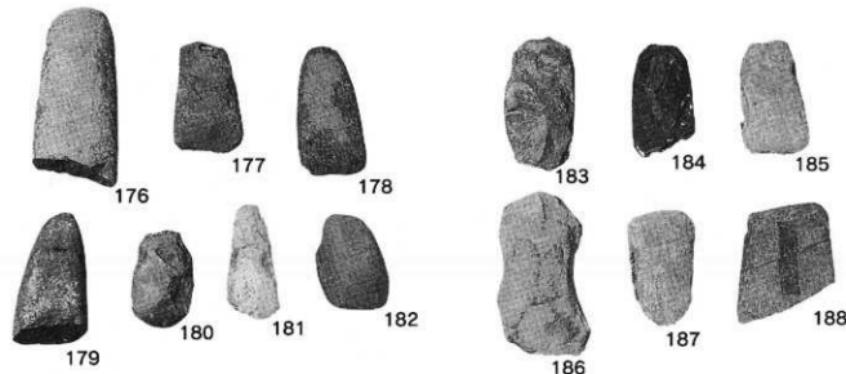
圖版 4 出土遺物 1



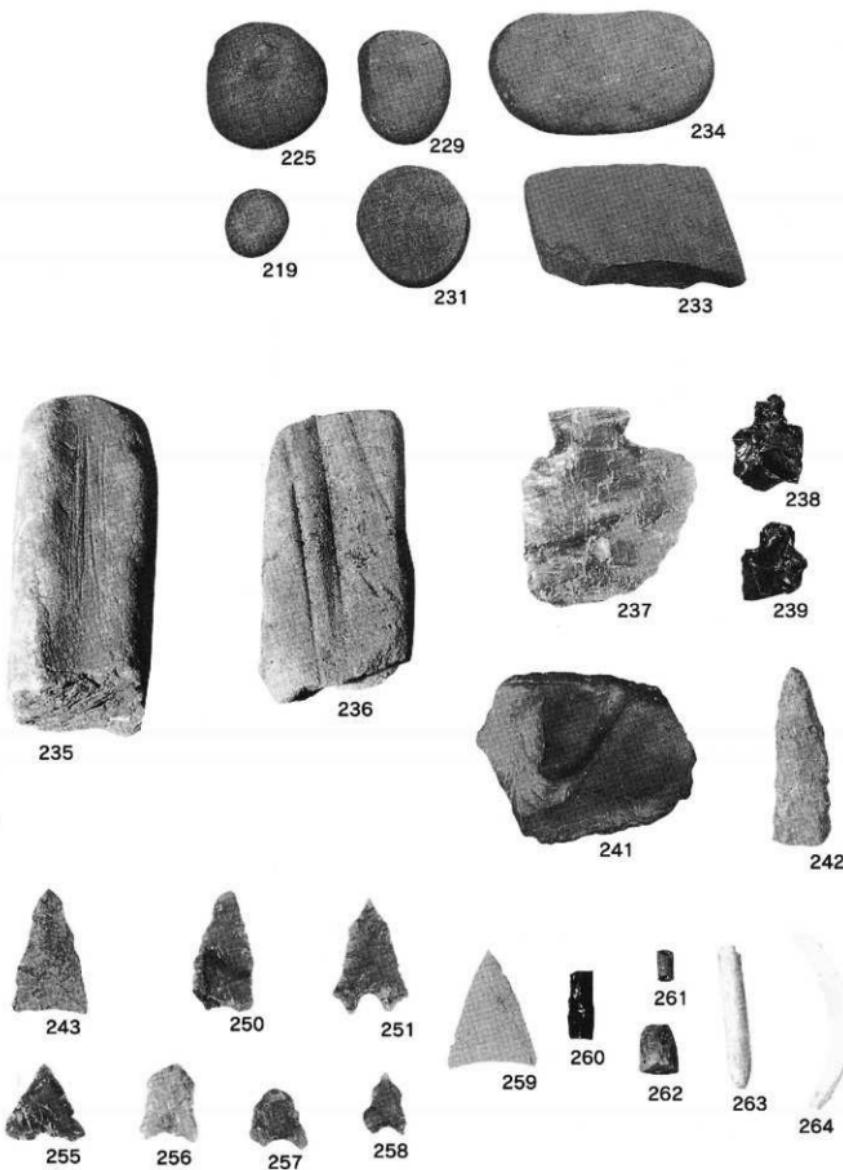
図版5 出土遺物2



圖版 6 出土遺物 3



図版7 出土遺物4

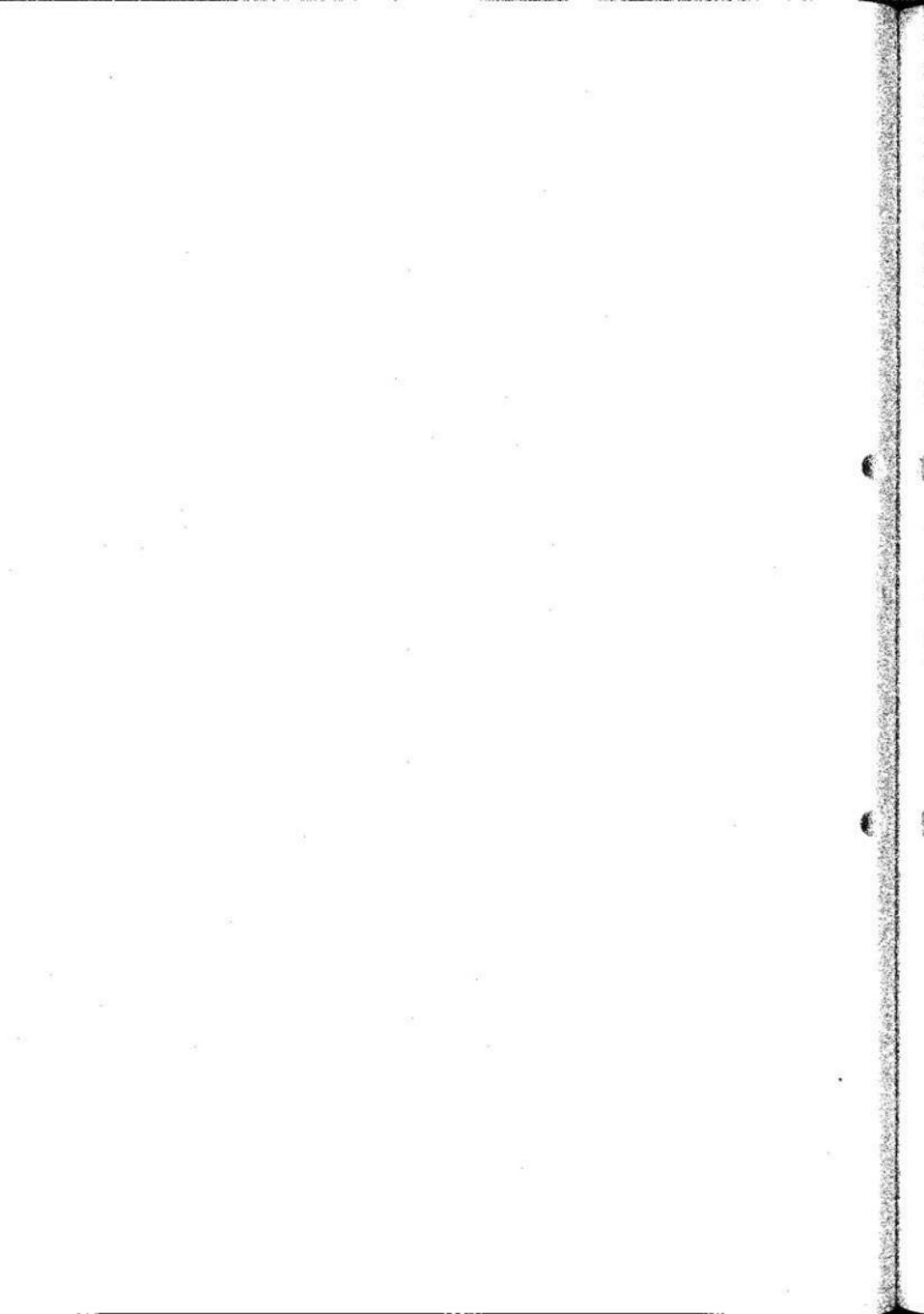


図版8 出土遺物5

圖版 9 出土遺物 6



附 松添遺跡の概要



目 次

松添遺跡の概要	5 9
第1図 松添遺跡調査区図	6 0
図版 1 調査状況 1	6 3
図版 2 調査状況 2	6 4
図版 3 調査状況 3	6 5
図版 4 調査状況 4	6 6
図版 5 調査状況 5	6 7
図版 6 調査状況 6	6 8
図版 7 出土状況 1	6 9
図版 8 出土状況 2	7 0
図版 9 出土状況 3	7 1
図版 10 出土遺物 1	7 2
図版 11 出土遺物 2	7 3
図版 12 出土遺物 3	7 4
図版 13 出土遺物 4	7 5
図版 14 出土遺物 5	7 6
図版 15 出土遺物 6	7 7
図版 16 出土遺物 7	7 8
図版 17 出土遺物 8	7 9



附 松添遺跡の概要

松添遺跡は青島シーガル土地区画整理事業に伴い発掘調査された地区全体を指しており、その一角には松添貝塚も含んでいる。発掘調査は平成4年度から平成7年度まで行い、平成4年度は道路敷きに当たる部分、平成5年度は道路西側の部分と道路北側の斜面、平成6年度は道路北側の斜面の東側隣接部、平成7年度は道路北側の旧テニスコート部分を行った。

平成4年度は、南側から北に向かってA～D区を設定した。A区では土坑の中に黒色磨研土器や円孔文土器を出土し、B区では一面の岩の間に土器が点在し、C区では砂に摺鉢状の土坑や竪穴状遺構が見られ、D区では土器が東から西に傾斜して堆積した形で出土し、東側で市来式土器、西側で三万田式の無文土器が多く出土した。

平成5年度は、道路西側の部分をE区、道路北側の緩斜面をF区、その北側の斜面部分をG区と設定した。E区では、北側で三万田式土器、南側で貝殻腹縁文土器が多く堆積した状態で見られた。F区は、南側は疊層状態であり北側では遺物遺構の検出は殆どなかったがほぼ中央部で集石遺構が1基検出された。土器では、ともに市来式土器が多く見られた。G区は、大小2基の円形竪穴状遺構が検出され、市来式土器と貝殻腹縁文土器が多く出土した。

平成6年度は、G区の東側を拡張した調査を行い南側の斜面裾部で削り出し状の段を2段検出し、北側は前年度と同様であることを確認した。

平成7年度はH区としたが、既にテニスコートを建設する際に搅乱されているためか遺構の検出、遺物出土は殆ど無かった。

D区からG区にかけての土器の出土状況に共通して言えることは、完形に近い土器や大型の破片が目立つことであり、その殆どが土器や石、岩と重なった形で出土することである。

出土遺物は、土器はその他に磨消繩文土器、組織痕土器等、石器は石鏃、石匙、箆状石器、軽石製品、石錘等が出土し、そのほかには、勾玉、管玉、垂飾り等も出土している。

松添遺跡全体を見てみると、松添貝塚をその東端の海に向かって傾斜する部分に持ち、次に丘陵から延びる砂丘状の1段高い部分があり、西側は谷間（知福川）に向かってなだらかに傾斜している。発掘調査時には、丘陵部は既に畑として利用されていたため、数段に整形されており旧地形を残しているとは思われない。そのためB・C・F区の調査では基底部の岩層に当たった可能性がある。D・E区は西に行くに従って水が湧く地区であり、層序も全て粘土混じりの砂層が包含層、水田層を形成しており、居住に適しているとは考えられない。土器の出土量が膨大なことに対して、遺構の少なさ、特に市来式、三万田式土器時期の遺構が検出されなかつたのは不思議であるが、単に土器の堆積の厚みのため遺構面が埋まっていたのを調査段階で見極められずに土器取り上げ時に掘り飛ばした可能性もあり、今となっては残念である。しかし、D・E区の水が湧くという条件から考え、土器の廃棄場所としていた可能性が最も高いと考えられる。

土器の出土状況からすると、北西の丘陵部に市来式土器、中央部に三万田式土器（貝殻腹縁文土器）、南側に黒川式土器という大まかな区分ができ、恐らく丘陵上における利用域の変遷

第1図 松添道路調査区図



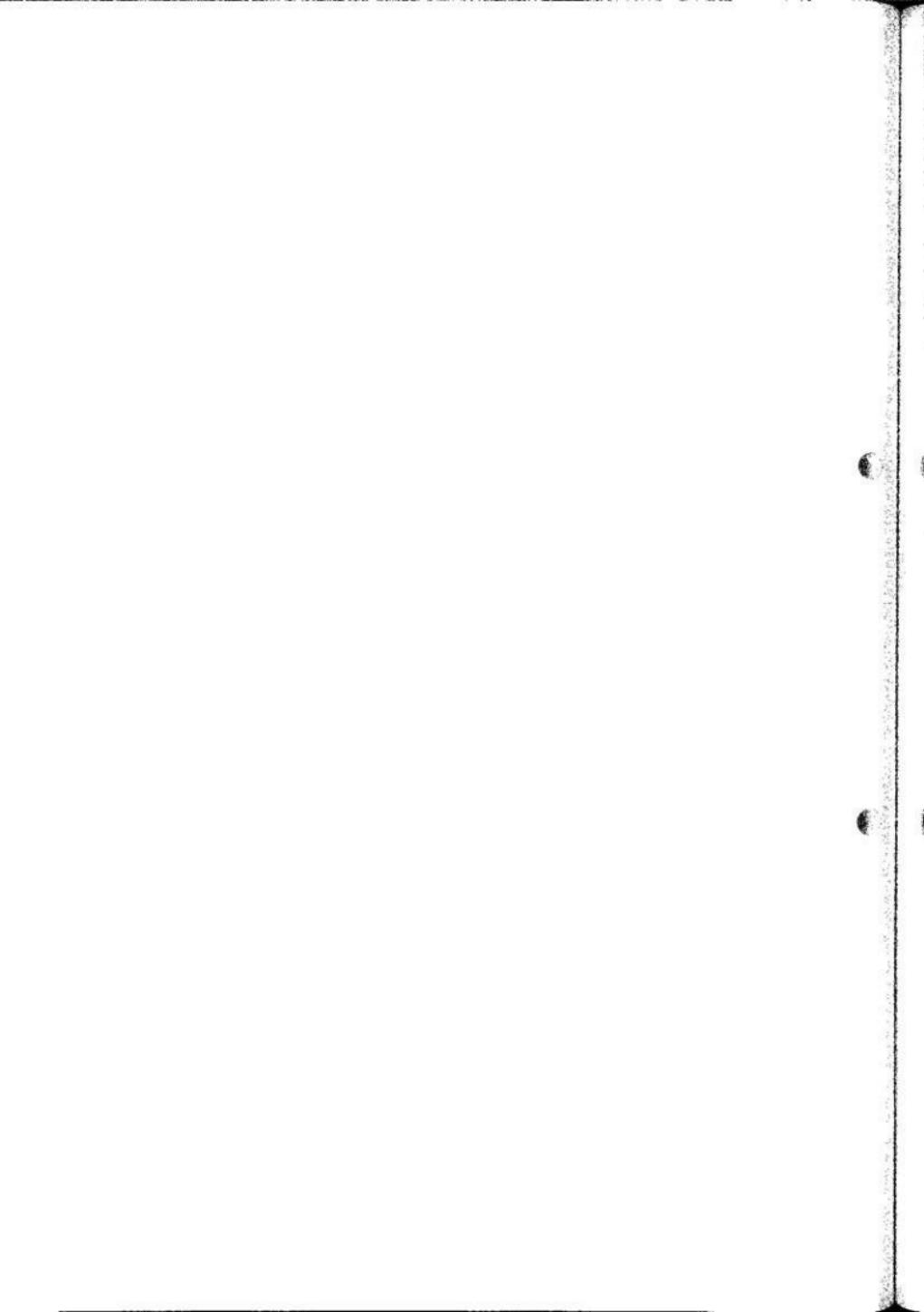
を示していると思われる。しかし、縄文時代後期後半から晩期前半頃までの土器が継続して出土しているにしては、住居等の遺構が少ない点が注目される。仮に、調査時に土器が折り重なっていたために住居等の遺構を掘り飛ばしたとしても、それは継続的な居住では無いためにすぐに放棄され土器捨て場になってしまったためであり、言い換れば同一型式内で住居の放棄と土器の廃棄が行われていると考えられる。さらに、松添貝塚は後期末以降の貝塚であり、市来式土器は出土していない。だとすれば、市来式土器から三万田式土器にかけての多量の土器出土は、定住によるものではないと考えられる訳で、継続的な土器出土とは相反することとなる。この点について筆者は、北側斜面の堆積層最下層部において焦土と細かな炭が混じった薄い層が検出されたことから、当遺跡が定期的に土器を制作するための工房的な意味合いを持っているためと考えているが、焼成土坑等の遺構が検出されなかった点で根拠は希薄である。

また、松添貝塚は後期末と晩期前半期の上下の2層に分かれる貝塚であり、後期後半の市来式土器の時期のものは見られないことも注目される。このことは、貝塚を形成するような定住を行うのは後期末からであり、その際にも断絶が見られるうえに、晩期後半以降は土器すら殆ど見られず、居住域を外れたと考えられる。

このように見てくると、松添遺跡は、後期の後半期は定住ではなく短期だが継続して利用された場所であり、後期末からは定住傾向が始まる遺跡ということになり、土器の連続性が外來土器の不連続と在地の土器の継続とでは異なる点と合わせて注目され、今後の整理の課題として残されている。

図版遺物番号

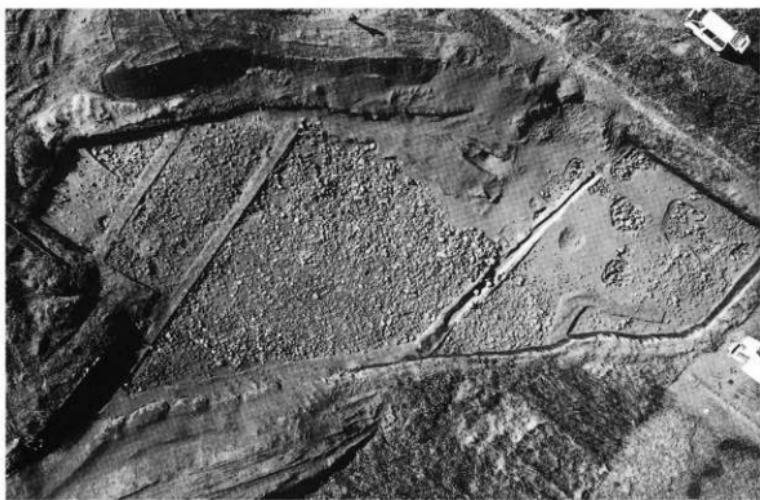
1~31・40~45・77~89	市来式土器	32~36	松添式土器
37~39・46・47・69~76	その他の土器	48~54	磨消縄文土器
55・56	磨消縄文系土器	57・58	御領式系土器
59・60	黒川式土器	61~68	三万田式土器
90	土製品（人面形土器か）	91	梳（青島古墳出土）
92・93	土器片円盤	94	土器片鍤
95~105	石鍤	106・107	石鍤
108~111	石匙	112~116	石錐
117・118	範状石器	119・120	勾玉
121・122	垂飾	123~128	小玉
129~132	軽石製品		





A~D区

図版2 調査状況2

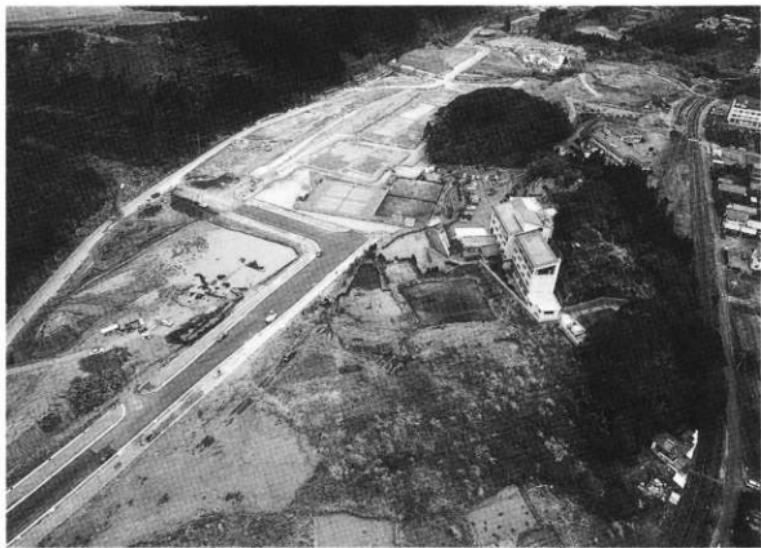


B+C区



D区

図版3 調査状況 3



E～G区

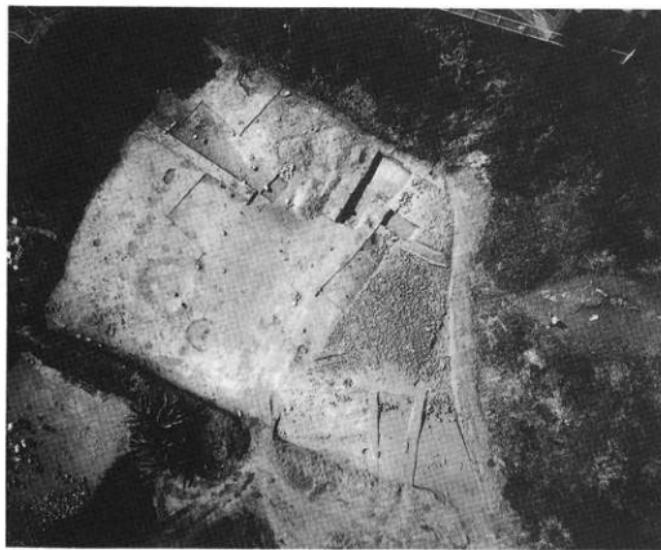


E区

図版 4 調査状況 4



F・G区



G区拡張後

図版5 調査状況 5



H区



青島古墳